

科目名	(新)教職論(前期・後期)半期完結
担当者	鳥谷部 志乃恵

11. 教員の採用・任命

12. 教員の地位と身分・待遇と勤務条件・研修

講義の目標

教職の意義や教師の役割、職務内容に関する学習を通して、教員免許状を取得しようとする教職課程履修者が、教師という仕事はどんな仕事なのか、自分は教師に向いているのだろうか等を多角的に考察する機会をもつことができることを目標とする。

講義概要

教師になるために必要な学習内容、教師の仕事の内容、教師に求められている資質・能力、大学における教員養成と教育委員会等の教員採用の実態、教師の待遇や研修等について学習する。

テキスト

「教職入門 教師への道」

吉田辰雄 大森 正 編著 図書文化

参考文献

必要に応じて審議会資料等を配布する。

「教師が壁をこえるとき」 石井順治・牛山栄世・前島正俊 著 岩波書店

評価方法

テキストの予習を前提に課題を提示し、それについてのレポートの提出を求める。レポートは学習内容のまとまりに応じて提出することになるので、それらのレポートを総合評価する。

受講者への要望

テキスト及び教職論のためのノートを必ず持参して受講すること。講義を聴くことだけではなく、自ら考え、それらをまとめ、文章化する作業を重視する。毎回の授業で質問票の提出を義務づけます。

年間授業計画

1. 教職課程で学ぶこと
2. 最近の子どもの生活
3. 最近の学校の中の子ども
4. 教師の仕事(学習指導)
5. 教師の仕事(生徒指導・教育相談・進路指導)
6. 教師の仕事(学級経営)
7. 教師に求められる資質・能力
(これまでの教師には何が求められてきたのか)
8. 教師に求められる資質・能力
(いま教師には何が求められているのか)
9. 教師に求められる資質・能力
(学ぶことと教えること)
10. 教員養成の制度・教職課程の仕組みと内容

科目名	(新)教職論(前期・後期)半期完結
担当者	川村 肇

講義の目標

教職課程で学ぶ諸科目の入門として、教職に就く心構えを学び、さまざまな角度から教育観・学校観を鍛えることを目標とする。

講義概要

1. 「学級崩壊」「いじめ」「不登校」など、現代教育の抱えている諸問題を取り上げて、まず実態をビデオ等により確認し、参加者で討議する。
2. 諸問題が教育や社会に投げかけている問題を認識し、今後の学習につなげていく道筋を理解していく。

テキスト

- ・配布プリント類

参考文献

- ・無着成恭『山びこ学校』(岩波文庫)
- ・小西健二郎『学級革命』(国土社)
- ・黒柳徹子『窓際のトットちゃん』
- ・宮本誠貴『能力主義をぶっとばせ』

評価方法

- ・適宜課すレポートによる。

受講者への要望

- ・参加者の討議を取り入れるので、積極的な参加を望む。
- ・前期は6月、後期は12月の第1土日に予定されている小中学校の先生たちの学習会合宿(1泊2日)にできる限り参加すること。(宿泊参加費1万円程度)
- ・討議の進展度合い等により、シラバス通りには進まないこともある。

年間授業計画

1. 講義の進め方の説明 / 本学で教職免許状を取得できるのはなぜか
2. 「学級崩壊」を考える (1) 学級崩壊の実態
3. " (2) 討議 学級崩壊にどう取り組むか
4. " (3) 学級崩壊を考える
5. 「いじめ」を考える (1) いじめの実態
6. " (2) 討議 いじめをどうしたらなくせるか
7. " (3) いじめをなくすために

8. 「不登校」を考える (1) 不登校とその実態
9. " (2) 討議 不登校は是か非か
10. " (3) 不登校から学ぶもの
11. 学校とはどういうところか
12. まとめ

科目名	(新)教育原論 (旧)教育原論 (前期・後期)半期完結
担当者	鳥谷部 志乃恵

講義の目標

動物の飼育や植物の栽培とは異なる人間の教育の本質と目的について、教育哲学の視点から考察を加え、理解を深めることを目的とする。

講義概要

次の事項について講義する。

- ・教育の概念と基本的構造
- ・現代社会における教育目的の構造
- ・教育観の基点としての子ども観
- ・教育観の展開

テキスト

『教育と教育観』原聡介他共著 文教書院

参考文献

授業の中で必要に応じて指示する。

評価方法

評価は授業の中で提示する小レポートの提出と定期試験によって総合的に判断する。

受講者への要望

毎回の授業で質問票の提出を義務づけます。

テキストを読んで予習してくる。必要に応じて資料を配布し、課題を提示し、授業時間の中でレポート作成の作業をおこなうこともあるので教育原論のノートを準備すること。

年間授業計画

1. 教育とは何か
 - (1) 教育の概念
 - (2) 教育の機能
 - (3) 現代社会と教育機能の問題
2. 教育のめざすもの
 - (1) 教育目的がなぜ問題になるのか
 - (2) 教育目的の設定
 - (3) 民主主義と教育目的
3. 子どもをどのようにとらえるか
 - (1) 子どもへのまなざし ...生命...
 - (2) 子どもへのまなざし ...価値...
 - (3) 子どもへのまなざし ...関係...
4. 人は教育に何を期待してきたか
 - (1) 古代、中世の教育観
 - (2) 近代的教育観
 - (3) 今日の教育観

科目名	(新)教職原論 (前期・後期)半期完結 (旧)教育原論
担当者	川村 肇

- | | | |
|-----|---|-------------------|
| 10. | " | (2) 子どもの人権と子どもの権利 |
| 11. | " | (3) 「能力に応じた教育とは何か |
| 12. | " | (4) 義務教育と学習権、参加権 |

講義の目標

教育の本質を理解するために、自らの教育観を相対化しつつ、さまざまな基本的概念や考え方を学ぶ。

講義概要

1. 教育と学習との関係を様々な角度から考えていく。
2. 子どもの権利条約や教育基本法等を素材にして、人権と子どもの権利、能力の問題、義務教育等の基本的な概念や考え方を学ぶ。

テキスト

- ・配布プリント類

参考文献

- ・堀尾輝久『教育入門』(岩波新書)
- ・堀尾輝久『教育基本法はどこへ』(有斐閣新書)
- ・『子どもの権利条約 実践ハンドブック』(旬報社)
- ・里見実『働くことと学ぶこと』(太郎次郎社)
- ・佐藤学他『学びへの誘い』(東大出版)

その他授業中に紹介する。

評価方法

数回のレポートと、期末試験とを併せて評価する。

受講者への要望

- ・討議を多く取り入れるつもりなので、積極的に参加されたい。
- ・前期は6月、後期の12月の第1土日に予定されている小中学校の先生たちの学習会合宿(1泊2日)にはできる限り参加すること。(宿泊参加費1万円程度)

年間授業計画

1. 講義の進め方の説明
2. 学ぶとはどういうことか (1) わかるということ
3. " (2) 学びと労働
4. " (3) 教えることと学ぶこと
5. " (4) わかるための授業
6. " (5) 学びのある授業
7. 「総合的な学習の時間」について
8. 教育と集団
9. 子どもの権利を考える (1) 私たちの「子どもの権利宣言」の作成

科目名	(旧)教育原論 (前期・後期)半期完結
担当者	川 村 肇

講義の目標

日本の教育の歴史を学び、基礎的な知識を獲得することによって、教育の本質に迫るとともに、現代社会の教育を見る眼を養うことを目的とする。

講義概要

江戸時代以降現代までの日本の教育の歴史を講義する。参加者は分担して、該当するテキストの部分および同時代の日本史について調べて発表する。

なお、受講者が5人以下の場合には、開講しない。

そのため、第1回めの授業には必ず参加すること。

テキスト

- ・石島他『日本民衆教育史』(梓出版)

参考文献

- ・大田堯『戦後日本教育史』(岩波書店・品切れ中)
- ・寺崎他『近代日本教育の記録』(全三巻、日本放送協会出版、品切れ中)
- ・堀尾輝久『現代社会と教育』(岩波新書)
- ・山住正己『日本教育小史』(岩波新書)

その他、授業中に紹介する。

評価方法

参加者による発表および、期末レポートによる(期末レポートは、講義中に関心を持った教育史に関わる事項等を素材とする)。

年間授業計画

1. 講義の進め方の説明 / 参考文献の紹介
2. 江戸時代の教育 (1) 二つの知
3. " (2) 諸教育機関について
4. 「学制」と近代学校について
5. 日の丸と君が代 / 儀式と教育
6. 教育勅語について
7. 大正自由主義教育について
8. 生活綴方教育について
9. 天皇制ファシズム下の教育
10. 敗戦から「逆コース」へ
11. 政治支配から経済支配へ
12. 今日の教育

科目名	(新)教職心理学 (旧)教職心理学 (後期)
担当者	瀧本孝雄

講義の目標

教職に必要な心理学的基本問題について講義する。

前半では主に教育心理学の領域について、後半では主に青年心理学の領域について考察し、人間理解、生徒理解を深めていく。

講義概要

教育心理学の対象と方法、学習・知能の心理学、記憶・思考の心理学、教育の評価と測定、教師の資質とリーダーシップ、青年心理学の対象と方法、青年期の意義と特徴、問題行動、特殊教育の問題点などについて講義する。

テキスト

特に指定しない。

評価方法

評価方法は講義、グループ・ワークに関しての小テスト、レポートおよび出席状況による。

受講者への要望

出欠席は毎回とるので、欠席しないこと。

年間授業計画

1. 教育心理学の対象と方法
教育心理学とは何か。教育心理学で扱う問題について講義する。
2. 学習・知能の心理学
教育における学習・知能の意義とその役割について講義する。
3. 記憶・思考・認知の心理学
教育における記憶・思考・認知について、その意義と役割について講義する。
4. 教育の評価と測定
教育評価の意義とその問題点を具体的事例をもとに講義する。
5. 教師の資質とリーダーシップ
望ましい教師のあり方、教師の資質について検討する。
6. 特殊教育の心理
特殊教育の諸問題について、総合的に考察する。
7. グループ討議
現代の中学生、高校生の特徴と問題点について相互に討議する。
8. 青年心理学の対象と方法
青年心理学とは何か。青年心理学で扱う問題について講義する。

9. 青年期の意義と特徴

人生サイクルの中での青年期の意義とその特徴について講義する。

10. ライフサイクルと発達段階

胎生期から老年期までの各発達段階の特徴について講義する。

11. 青年期の発達課題

各発達段階での発達課題と比較しながら、青年期の発達課題の特徴を検討する。

12. 現代青年の特徴

調査結果等をもとに現代青年の特徴について考察する。

科目名	(新)教職心理学 (旧)教職心理学 (前期)
担当者	鈴木乙史

講義の目標

教師の仕事は、主として教科教育と生徒指導から成り立っている。教職に就く者として、児童・生徒の心のあり方を理解することは欠かすことができないことである。本講義では、人間の心の発達のプロセス、学習のメカニズムを理解することを目標にしている。

講義概要

乳幼児期からはじめるが、主として青年期を中心として講義を行う。

テキスト

鈴木乙史「性格形成と変化の心理学」ブレーン出版

参考文献

講義の中で適宜指示する。

評価方法

前期末に筆記式のテストを行う。

受講者への要望

特になし。

年間授業計画

1. オリエンテーション
2. 発達 生得的要因
3. 発達 愛着と母親刺激の剥奪
4. 発達 自律性
5. 発達 自己意識
6. 発達 自我同一性
7. 学習 無学習性行動と学習性行動
8. 学習 学習のメカニズム
9. 学習 モデリング
10. 教授 学習過程
11. 新しい知能観
12. まとめ

科目名	(新)教職心理学 (旧)教職心理学 (前期)
担当者	森川正大

講義の目標

教育は、人間の「発達」及び「学習」の過程にかかわるはたらきである。この科目は、教育の心理学的基礎として、生涯発達の観点から幼児、児童及び生徒の心身の発達の過程及び学習の過程について学ぶことを目標とする。

「発達」及び「学習」についての理論学習とともに、青年期の生徒にかかわる教師のあり方についても考察したい。

講義概要

人間の「発達」及び「学習」の過程の諸問題を中心として、以下の課題を扱う。

教育心理学の課題 発達過程の諸原理 学習過程の諸原理 生徒の個人差とアイデンティティの形成 教師の役割

テキスト

テキストは用いない。プリントによる。

参考文献

そのつど指示する。

評価方法

以下を総合して評価する。

出欠 授業中に課す提出物 期末試験

受講者への要望

第1回目の授業の際「履修者に関するアンケート」をとる。遅刻は減点する。

年間授業計画

1. 教育心理学の課題
2. 人間の成長と発達の原理
3. 発達段階と発達課題
4. 児童期までの発達
5. 青年期の発達
6. 社会性・道徳性の発達
7. 学習の原理
8. 内発的動機づけと学習意欲
9. 個人差と教育
10. アイデンティティの形成
11. 教育測定と評価
12. 教師の自己点検/まとめ

科目名	(新)教職心理学 (旧)教職心理学 (前期)
担当者	横田 雅弘

講義の目標

教職心理学では、実際に教職についたときに役立つ心理学の実践的知識ならびに教職試験に必要な知識の概略を身につけることを目的とする。ただし、学生には、単に知識を暗記するのではなく、それらの知識を通して教職という仕事についての自分なりの考え方を確立してほしい。

講義概要

教職心理学は講義中心の授業であるが、教職についたときに必要となる心理学の知識をこのような短期間に網羅することは不可能である。そこで、ここでは主に人間関係にポイントを絞り、子供の社会性の発達や青年の心理、あるいは学校不適應の問題などを扱う。できるだけ身近な例をもとに、教職の立場からだけでなく、将来受講者が親になったときの立場からも役立つ知識を提供する。

テキスト

サブ・テキストとして『教育心理学』岸本弘編著 学文社(¥1,000)を用いる。

参考文献

教職試験の準備のためには、この授業でカバーしきれないところを整理しておく必要がある。授業の中で参考文献のリストを配布する。

評価方法

評価は最終の試験をもとに行う。試験は持ち込み不可の記述式で、熱心に授業に出席していなければよい評価は困難な問題である。

受講者への要望

将来教師になると決めている人も決めていない人もいると思うが、いずれにしても人間教育を重要視する熱心な学生の受講を期待する。全回出席を原則とする。

年間授業計画

1. オリエンテーション
2. 発達と教育：発達観と教育、認知的発達、道徳性の発達、知能の発達と創造性
3. 人間関係と社会性の発達(1)：親の養育態度と子供のパーソナリティ
4. 人間関係と社会性の発達(2)：学級集団のダイナミクス(友人関係、教師生徒関係など)
5. 学習指導と教育評価(1)：学習理論、動機づけ、教育評価など

6. 学習指導と教育評価(2)：上記テーマの続き
7. 青年期の身体成熟と心理特性(1)
8. 青年期の身体成熟と心理特性(2)
9. 学校不適應と精神衛生(1)：登校拒否、暴力、いじめなど
10. 学校不適應と精神衛生(2)：カウンセリングの基礎知識
11. 学校不適應と精神衛生(3)：上記テーマの続き
12. 前期末テスト

科目名	(旧)教職心理学 (後期)
担当者	鈴木 乙 史

講義の目標

目の前にいる一人の子ども(人間)を、どのように理解することが可能か。また、有効な援助とは何か、そしてどのように援助すれば良いのか。生徒指導やカウンセリング(心理相談)の方法を講義する。

講義概要

他者を理解するためには、自己を理解することも必要である。自己理解と他者理解について多くの実習を含めながら、講義をすすめていく。

テキスト

特になし

参考文献

講義の中で適宜指示する

評価方法

出席、課題の達成度、レポートの評価で行う。

受講者への要望

多くの課題を出すため、きちんと出席できる学生のみ受講して欲しい。

年間授業計画

1. オリエンテーション
2. 児童期・青年期の精神障害
3. 精神病圏の精神障害
4. 神経症圏の精神障害
5. 学校と不応(いじめ、不登校など)
6. 自己理解と他者理解
7. 自己理解と他者理解
8. 会話について
9. 日常の会話の特徴
10. カウンセリングでの会話
11. カウンセリングの応用
12. まとめ

科目名	(新)教育制度 (旧)教育法規 (前期・後期)半期完結
担当者	池田賢一

講義の目標

学校教育に関する諸問題を検討しながら、教育の制度的側面の知識を深め、現代日本の教育改革の方向性(あり方)を批判的に検討していく。また、この作業を通して、教員の専門性についても考えていく。

講義概要

まず教育改革について最近の動きを確認した後、学校教育がどのような役割を担わされてきたのかについて、歴史的流れを学ぶことで考えを深めていく。そして、現在の教育制度の特徴や教育内容を規定する諸原理の問題点を明らかにしたうえで、「権利」としての教育をいかに保障していくか、具体的に考える。(入試制度や高校改革、障害児教育、外国人問題等)

以上から得られた知識・視点を活用して、最終レポートを提出してもらおう。

テキスト

とくに指定しない。(毎回プリント配布)

参考文献

- ・佐藤三郎、桑原敏明編『学校教育の基盤』協同出版
- ・『教育小六法』2002年版、学陽書房
- ・教育制度研究会編『要説 教育制度』学術図書出版社

評価方法

授業中に書いてもらうミニ・レポート(2回程度)の提出状況およびその内容、期末に提出してもらうレポート(様式等は授業中に指示)の内容とを総合して行う。

受講者への要望

新聞やインターネット等から教育についての最新情報を得よう、日常的に努力し、各人なりの教育観の確立に取り組むこと。

年間授業計画

1. 現代教育の諸問題 受講生自身が、今の学校のどこに問題を感じているのかについて意見を書いてもらう。
2. 現代の教育改革の特徴 第1回目の講義で提出してもらった意見をまとめると共に、中央教育審議会等の資料を元に教育改革の現状を考えていく。
3. 義務教育の歴史 1763年プロイセンの「一

般地方学事通則」を画期とする義務教育の歴史的流れを整理することで「義務」の意義を学ぶ。

4. 教育制度を支える法令 憲法、教育基本法にみる教育像を条文に沿って理解し、「権利としての教育」という考え方を学ぶ。(義務・無償・中立の原則)
5. 教育内容の検討 学校教育法の条文から各学校段階の教育目標を確認する。また、学習指導要領の内容もあわせて学習する。(経験主義から系統主義へ)
6. 学習指導要領と教科書 前回の講義内容を補足し、教科書の存在について考える。受講生に、「私の教科書体験」を書いてもらう。
7. 教科書問題 家永教科書裁判を紹介し、教科書検定について考えを深めると共に、そもそも教科書とは何かを考えていく。
8. 日本の教育改革史 明治期の「学制」の特徴を確認する。(「教育勅語」との比較)また、戦後の米国教育使節団報告書の内容も紹介する。
9. 教育における「平等」 教員と生徒とのコミュニケーション過程に着目し、教室内が平等な教育の場となっているかを検証していく。
10. 権利としての教育再考 障害児教育制度の現状と問題点について考える。世界的傾向であるインクルーシヴな学校のあり方を学ぶ。(外国人の子どもの問題を含む。)
11. 子どもの現状 情報化等、最近の子どもを取りまく環境と子どもたちの特徴について学ぶ。(人間とのふれあいの重要性を確認することになる。)
12. まとめとして 「ひとりひとりを大切に」という表現を、これまで学んできた知識や視点から分析していく。

科目名	(旧)生涯教育論 (司)生涯学習概論 (後期)
担当者	渋谷 英章

講義の目標

「生涯学習社会」は、現在ではあたりまえの言葉になっているが、ともすれば「学校を終えた人々に十分な学習機会が提供されれば生涯学習社会は完成する」という表面的で一面的な理解にとどまることが多い。この授業では、学校教育と社会教育をともに変革して両者の統合を図ることこそが、生涯学習社会の基本的な課題であるという視点から、生涯学習社会における学校教育と社会教育のあり方について追究する。

講義概要

まず、現在「生涯学習社会」が求められる背景と生涯教育の理念を検討する。そのうえで、生涯学習社会における学校のあり方を現在の日本の教育改革の動向に基づいて考察し、次に生涯各期の学習課題を明確にする。さらに、諸外国の事例との比較を通して、日本の生涯学習の現状と課題を分析する。

テキスト

使用する場合には授業中に指示する。必要に応じてプリントを配布する。

参考文献

- ・真野宮雄編『生涯学習体系論』東京書籍
- ・日本生涯教育学会編『生涯学習事典』東京書籍
- ・倉内史郎・碓井正久編著『新社会教育』学文社

評価方法

評価は、試験等の成績をもとに「体験レポート」の内容を加味して行う。「何を学んだか」という知識の量よりも、「いかに学ぶか」という学び方が問われるべきである生涯教育の原則から、試験にはこの原則にふさわしい問題を課し、ノートや各種の文献などの持参を認める。

なお、大学教育を除く生涯学習プログラムに実際に参加し、その「体験レポート」を提出することを義務づけ、最終試験受験の条件とする。

受講者への要望

授業への出席が必要条件であるが、出席してもただ単に板書を写すだけでは不十分である。講義内容を十分に理解し、さらにその内容について自分自身で考えることが重要である。

年間授業計画

1. 生涯学習社会とは
2. 「生涯教育論」

3. 「脱学校論」の学校批判
4. 社会教育の定義と特質
5. 社会教育の実際
6. ベダゴジーとアンドラゴジー
7. 生涯学習関連施策の展開
8. 学社連携と学社融合
9. 大学改革と生涯学習
10. 高齢化社会、男女共同参画社会と生涯学習
11. ノンフォーマル教育
12. 試験

科目名	(新)教育課程論(前期・後期)半期完結
担当者	鳥谷部 志乃恵

12. 欧米の教育課程政策について

講義の目標

学校において展開される教育課程についての理解を深めるとともに、教育課程と教育方法との関係を踏まえながら、学習者に対応して柔軟に教育課程編成や運営できるような基礎力を養うことを目的とする。

講義概要

次の事項について取り扱い

- ・教育課程の基礎概念
- ・教育課程の選択と配列
- ・教育課程の類型
- ・教育課程の展開
- ・わが国の教育課程の編成とその基準
- ・教育課程政策(学習指導要領改訂の流れ)
- ・欧米の教育課程政策について

テキスト

『新制教育原理』名倉英三郎編、八千代出版

参考文献

「教育課程編成の視点」小野慶太郎著 東洋館出版社

「教育課程論」伊藤信隆著 建帛社

新版「教材と教具の理論」中内敏夫著 あゆみ出版

中学校学習指導要領、高等学校学習指導要領

評価方法

定期試験の結果から判断する

受講者への要望

中学校、高等学校の学習指導要領は必ず入手すること。

参考文献には目を通しておくこと。

年間授業計画

1. 教育課程の意義
2. 教育課程と教育方法の関係
3. 顕在的カリキュラムと潜在的カリキュラム
4. 教育課程の選択と配列
5. 形式陶冶と実質陶冶
6. 陶冶材としての文化と経験
7. 教育課程の類型(コア・カリキュラム等について)
8. わが国の教育課程
9. 教育課程改革の変遷 (1)
10. " " (2)
11. 教育課程の運営と課題

科目名	(新)教育課程論(前期)
担当者	安井一郎

講義の目標

本講は、学校教育、とりわけ教育内容をめぐる問題状況をふまえながら、教育課程の研究、実践に関する今日的課題について考察することを目的とする。

講義概要

学校において展開されている毎日の授業や諸活動は、一定の教育目的を達成するために編成される教育内容に関する計画である教育課程に基づいて行なわれている。いわば、教育課程は、学校教育における中核としての役割を果たしている。本講では、以上のような観点から、教育課程の編成と評価という問題を中心に、わが国の戦後教育の歩みと教育課程の変遷、新教育課程の分析と課題の検討、今日の学力問題、諸外国における教育課程改革の動向等の問題を取り上げ、各種資料、VTR教材などを用いながら、多面的に検討を加え、教育課程研究に関する理解を深めていく。

テキスト

未定

参考文献

講義の中で紹介する。

評価方法

出席、レポート、試験による総合評価

受講者への要望

レポートや感想文を数回提出してもらおう予定である。講義の中で紹介する文献には、できるだけ目を通すことを望む。

年間授業計画

1. 教育課程とは何か
2. 教育課程の構造と類型
3. 教育課程編成の理論と方法
4. 学習指導要領と教育課程(1)
5. " (2)
6. 新教育課程の検討
7. 総合学習の可能性
8. 生活教育の系譜
9. 教育課程の評価
10. 教育課程と学力問題
11. 諸外国における教育課程改革の動向
12. 教育課程研究の今日的課題

科目名	(新)ドイツ語科教科教育法 (旧)ドイツ語科教育法 (前期)
担当者	本 多 喜三郎

講義の目標

ドイツ語の教授法を歴史的に概観し、ドイツ語教員としての基礎的知識を養う。

講義概要

テキストの要約を中心に進める。

テキスト

G. Neuner / H. Hunfeld : "Methoden des fremdsprachlichen Deutschunterrichts"

参考文献

その都度指示する。

評価方法

出席状況および期末試験による。

受講者への要望

欠席をしないこと、なるべく も受講すること。

年間授業計画

1. オリエンテーション
2. Einleitung
3. Die Grammatik-Übersetzungs-Methode (1)
4. " (2)
5. Die direkte Methode (1)
6. " (2)
7. Die audiolinguale Methode
8. Die audiovisuelle Methode
9. Die vermittelnde Methode
10. Die Entwicklung der kommunikativen Didaktik
11. Der interkulturelle Ansatz
12. まとめ

科目名	(新)ドイツ語科教科教育法 (後期) (旧)ドイツ語科教育法
担当者	本 多 喜三郎

講義の目標

模擬授業による教壇体験をつむ。

講義概要

模擬授業

評価方法

出席状況および教壇実習による。

受講者への要望

教材研究及び教案作成をしっかりとやること、欠席をしないこと。

年間授業計画

1. オリエンテーション
2. 模擬授業による教授法の研究
3. "
4. "
5. "
6. "
7. "
8. "
9. "
10. "
11. "
12. ドイツ語教授法のまとめ

科目名	(新)英語科教科教育法 (前期) (旧)英語科教育法
担当者	秋山 武夫

講義の目標

英語を教えるとはどういうことなのか、英語教育はどうあるべきか、理想の英語教育はどうあるべきかなどを、出来るだけ現場をふまえて考えていきます。

講義概要

理論を主として授業のありかたを概説し、評価の方法、教案の作り方等を講義します。

、 の両方を受講することが望ましい講義です。

テキスト

「英語教育学概論」(金星堂)

参考文献

なし。

評価方法

この講座は「職業に関する科目」ですので、出席を重視します。2回欠席したら、評価Aは出しません、遅刻2回は欠席1回とみなします。

受講者への要望

現代の日本の英語教育界には、若い有能な教師が必要です。鋭意、実力を養い、実際に教員になって、新風を吹きこむ気概を持って受講してほしい。

年間授業計画

1. 序論。英語教育のあるべき理想について語ります。
2. 過去の日本において行なわれていたさまざまな教育法、歴史を述べます。
3. パーマーの教育法について。
4. パーマーの教育法について。
5. フリースの教育法について。
6. フリースの教育法について。
7. フリースの教育法について。
8. 外人教師とのチーム授業について。
9. 測定と評価。
10. 教案の作り方(中学)。
11. 教案の作り方(高校)。
12. Video による授業の研究。

科目名	(新)英語科教科教育法 (後期) (旧)英語科教育法
担当者	秋山 武夫

講義の目標

英語科教育法を受講した人、またはしている人を対象として、その人たちが実技、つまり実際に授業を行う時間です。教育実習、教員採用試験に役立つ講義にするつもりです。

、の両方を受講することが望ましい講義です。

講義概要

全員に授業をしてもらいます。授業をすることがどんなに難しいかわかってもらいます。また、授業をすることが、どんなに教育実習に役立つか経験してもらいます。

テキスト

なし。

参考文献

なし。

評価方法

この講座は「教職に関する科目」ですので、出席を重視します。2回欠席したら、評価Aは出しません、遅刻2回は欠席1回とみなします。

受講者への要望

現代の日本の英語教育界には、若い有能な教師が必要です。鋭意、実力を養い、実際に教員になって、新風を吹きこむ気概を持って受講してほしい。

年間授業計画

1. Videoによる授業学習
2. 各人の授業実習
3. "
4. "
5. "
6. "
7. "
8. "
9. "
10. "
11. "
12. "

科目名	(新)英語科教科教育法 (前期) (旧)英語科教育法
担当者	阿部 一

講義の目標

本講座は将来、主として日本国内で中学校、高校（あるいは小学校や大学さらには各種学校や塾など）で英語教師を志すという人のために、最新の英語教授法をその理論的枠組みを紹介し、ワークショップ形式で色々と実践して慣れてもらうものです。特にこれからの教師はコミュニケーションな面を意識して高めていく必要がありますので、そのためのプレゼンテーション・テクニク、クラスルーム・イングリッシュ、ゲームやシミュレーションなど数多くの実践パフォーマンス・テクニクをマスターしてもらいます。

講義概要

日本の英語教育は今後より「実践的コミュニケーション能力」の養成に力点を置いた形で進められることを鑑みながらも核となる部分を十分に踏まえた上で、各種の具体的なテクニクを全員で実践し、研究・反省しながら慣れてもらう。前期は言語知識の核となる「語彙」や「文法」などをどうすれば効果的に指導できるかに重点を置き、後期は特に4技能の言語スキルをいかにして養成するか、各種のコツやテクニクを実際に模擬授業形式で行ってみる。もちろん、「実践」優位の講座なので前・後期を問わず発表や実技は行われる。なお、授業は用途に応じて日・英両語で行われるので留意すること。

テキスト

必要な資料やプリントを配る。

参考文献

授業内で紹介する。

評価方法

授業参加度（出席、グループ発表、実技など）50%
前期研究発表及びレポート（CLT 関係、教案、授業見学など）30% 授業内（各分野で行う）小テスト 20%
受講者への要望

実技や実践・発表が多いので出席は重要である。特に音声面を重視するので徹底した発音・発声訓練を行う。歌やドラマに参加することをいとわない人を歓迎する。その点を了解した上で受講して欲しい。

前期授業計画

1. オリエンテーション：日本の英語教育の現状と今後の展望について（+ビデオなどを使用）
2. 日本の英語教育に於ける教材や教授法の変遷と課

題（+ビデオなどを使用）

3. 教育現場の観察と授業分析・教材分析のポイント（+ビデオなどを使用）
 4. 発声訓練と発音指導（1） その考え方と実践（+ボイストレーニングの実際）
 5. 発声訓練と発音指導（2）実践：グループ練習（+歌などの指導）
 6. 発声訓練と発音指導（3）実践シミュレーション（+ドラマ・テクニクの手法）
 7. 語彙指導（1） その考え方とポイント
 8. 語彙指導（2）実践：グループ練習
 9. 語彙指導（3）実践シミュレーション
 10. 文法指導（1） その考え方とポイント
 11. 文法指導（2）実践：グループ練習
 12. 文法指導（3）実践シミュレーション
- 前期のまとめ：うまく教えるコツとテクニクとは？

科目名	(新)英語科教科教育法 (後期) (旧)英語科教育法
担当者	阿部 一

講義の目標

本講座は将来、主として日本国内で中学校、高校（あるいは小学校や大学さらには各種学校や塾など）で英語教師を志すという人のために、最新の英語教授法をその理論的枠組みを紹介し、ワークショップ形式で色々と実践して慣れてもらうものです。特にこれからの教師はコミュニケーションな面を意識して高めていく必要がありますので、そのためのプレゼンテーション・テクニック、クラスルーム・イングリッシュ、ゲームやシミュレーションなど数多くの実践パフォーマンス・テクニックをマスターしてもらいます。

講義概要

日本の英語教育は今後より「実践的コミュニケーション能力」の養成に力点を置いた形で進められることを鑑みながらも核となる部分を十分に踏まえた上で、各種の具体的なテクニックを全員で実践し、研究・反省しながら慣れてもらう。前期は言語知識の核となる「語彙」や「文法」などをどうすれば効果的に指導できるかに重点を置き、後期は特に4技能の言語スキルをいかにして養成するか、各種のコツやテクニックを実際に模擬授業形式で行ってみる。もちろん、「実践」優位の講座なので前・後期を問わず発表や実技は行われる。なお、授業は用途に応じて日・英両語で行われるので留意すること。

テキスト

必要な資料やプリントを配る。

参考文献

授業内で紹介する。

評価方法

授業参加度（出席、グループ発表、実技など）50%
前期研究発表及びレポート（CLT 関係、教案、授業見学など）30% 授業内（各分野で行う）小テスト 20%
受講者への要望

実技や実践・発表が多いので出席は重要である。特に音声面を重視するので徹底した発音・発声訓練を行う。歌やドラマに参加することをいとわない人を歓迎する。その点を了解した上で受講して欲しい。

後期授業計画

1. オリエンテーション：どう指導すれば授業がコミュニケーションになるか？（+ビデオなどを使用）
2. コミュニкативな指導のコツとポイント：実践

シミュレーション

3. リスニングの指導（1）その考え方と実践
 4. リスニングの指導（2）実践：グループ練習 / 実践シミュレーション
 5. スピーキングの指導（1）その考え方と実践（+教室英語入門）
 6. スピーキングの指導（2）実践：グループ練習 / 実践シミュレーション（+T・T入門及びスピーチ / ディベートについて）
 7. リーディングの指導（1）その考え方と実践
 8. リーディングの指導（2）実践：グループ練習 / 実践シミュレーション（+アナウンスイングやインタビューングなどのテクニック）
 9. ライティングの指導 その考え方と実践（+インターネットの利用法）
 10. 授業・実践シミュレーション（1）（+教案 / 授業観察について）
 11. 授業・実践シミュレーション（2）（+評価と測定について）
 12. 授業・実践シミュレーション（3）（+教育実習 / 教員採用試験について）
- 後期のまとめ：全人的な教師として羽くために

科目名	(新)英語科教科教育法 (前期) (旧)英語科教育法
担当者	J . J . D U G G A N

講義の目標

The purpose of this course is to not just introduce the student to the necessary teaching techniques (how to teach), but also to establish a basis of understanding of the approaches, concepts and reasoning on which foreign language education is based, and upon which the student will be able to build and develop a coherent plan of instruction.

講義概要

We shall spend most of this term in reading, lecture, and discussion of the approaches, concepts and reasoning on which foreign language education is based.

As class time is limited and valuable, students will be expected to keep up on the reading on their own time. Class time will be reserved for lecture and discussion.

テキスト

Underwood, M. *Effective Class Management*.
Longman.
Handouts.

評価方法

Grades will be assessed based on in-class participation (and therefore attendance), a number of assignments, and a final quiz based on the text and lecture.

If you miss or are very late for more than 1/3 of the lessons, you will automatically fail.

年間授業計画

- 1 . Course description and explanation. Assignment.
- 2 . Theme: *The role of the teacher*. Lecture. Discussion. Longman text pp. 7-18
- 3 . Theme: *The influence of the teaching situation*. Lecture. Discussion. Longman text pp.19-24
- 4 . Theme: *The aspect of the classroom*. Lecture. Discussion. Longman text pp.25-57
- 5 . Theme: *The relationship of teacher, classroom and situation*. Lecture. Discussion. Assignment.
- 6 . Theme: *Considering "Why?"-- Approach*. Lecture. Discussion.
- 7 . Theme: *Considering "How?"--Traditional Methods*. Lecture. Discussion. Handouts.

- 8 . Theme: *Considering "How?"--New Methods*. Lecture. Discussion. Handouts.
- 9 .Theme: *Considering "What?"--Technique*. Lecture. Discussion.
- 10 . Theme: *Planning a syllabus*. Lecture. Discussion. Handouts. Longman text pp.58-79
- 11 .Theme: *Preparing a syllabus*. Lecture. Discussion. Assignment.
- 12 . First term summary & review. Assessment.

科目名	(新)英語科教科教育法 (後期) (旧)英語科教育法
担当者	J . J . D U G G A N

講義の目標

The purpose of this course is to, based on a basis of understanding of the approaches, concepts and reasoning on which foreign language education is based presented in the first term course, introduce the student to the necessary teaching techniques (how to teach) involved in teaching a successful language class.

講義概要

This course will be devoted to student in-class practice teaching based on the material covered in the first term, and incorporating practical teaching techniques that will be covered in reading and lecture.

We will first look at materials and techniques used in teaching the various language skills, and then develop a lesson plan making use of said techniques.

テキスト

Hubbard, P. et.al. *A Training Course for TEFL*. Oxford University Press.

Handouts.

評価方法

Grades will be assessed based on in-class participation (and therefore attendance), and a presentation and / or a final paper.

If you miss or are very late for more than 1/3 of the lessons, you will automatically fail.

年間授業計画

- 1 . Second term course description and set-up. Review of first term material.
- 2 .Theme: *Traditional Teaching Techniques*. Lecture. Discussion. Oxford text pp. 3-30. Presentations
- 3 .Theme: *Teaching Reading & Vocabulary*. Lecture. Discussion. Oxford text pp.41-61.
- 4 . Theme: *Teaching Reading & Vocabulary, Part 2.* Discussion.
- 5 .Theme: *Teaching Writing & Composition*. Lecture. Discussion. Oxford text pp.61-79.
- 6 . Theme: *Teaching Writing & Composition*. Discussion.
- 7 . Theme: *Teaching Listening*. Lecture. Discussion.

Oxford text pp.79-95.

8 . Theme: *Teaching Listening, Part 2.* Discussion.

9 . Theme: *Teaching Oral Communication*. Lecture. Discussion. Oxford text pp.198-205.

10 . Theme: *Teaching Oral Communication, Part 2*. Presentations. Discussion.

11 . Theme: *Teaching Oral Communication & Pronunciation*. Lecture. Discussion. Oxford text pp.207-239. Presentations

12 . Second term summary & review.

科目名	(新)英語科教科教育法 (前期) (旧)英語科教育法
担当者	浅岡 千利世

講義の目標

言語教育に関するさまざまな側面を理解した上で日本の教育現場という視点からこれからの英語教育を考える。

講義概要

言語教育に関する基本的な考え方やアプローチ、評価方法やレッスンプラン作成法などを紹介する。

テキスト

「新学習指導要領に基づく英語科教育法の構築と展開」(現代教育社) 青木昭六編

評価方法

出席、授業への貢献、レッスンプラン(日本語)、英語でのジャーナル(毎週提出)、期末試験を総合して評価する。

受講者への要望

発表や討論への積極的参加を通して、自分なりの理想の教師像を見つけて欲しい。

年間授業計画

1. Introduction
2. Teaching English as a foreign language
3. Approaches and methodologies
4. Syllabus and teaching guidelines
5. Textbooks
6. Lesson plans
7. Lesson plans
8. Team teaching
9. Testing
10. Assessment
11. Global education
12. Early education and bilingualism

科目名	(新)英語科教科教育法 (後期) (旧)英語科教育法
担当者	浅岡 千利世

講義の目標

言語教育に関するさまざまな側面を理解した上で日本の教育現場という視点からこれからの英語教育を考える。

講義概要

をふまえた上で、言語の 4 技能に関する実践的な指導方法を行い、模擬授業や討論を中心に進める。

と と両方受講することが望ましい。

テキスト

ホームページ <http://www2.dokkyo.ac.jp/~less0054/>

参考文献

“Teaching by Principles” (Prentice Hall Regents)

評価方法

出席、授業への貢献、授業見学、レッスンプラン(英語)、レッスンプランに基づいた模擬授業と自己評価を総合して評価する。

受講者への要望

発表や討論への積極的参加を通して、自分なりの理想の教師像を見つけて欲しい。

年間授業計画

- 1 . Introduction
- 2 . Classroom language
- 3 . Model lesson plan in English
- 4 . Lesson planning
- 5 . Lesson planning
- 6-8 . Micro-teaching 1
- 9 . Feedback session
- 10-12 . Micro-teaching 2

科目名	(新)フランス語科教科教育法 (前期) (旧)フランス語科教育法
担当者	中 村 公 子

講義の目標

教育実習をしたり、言語教育に携わっていく上で必要な言語教育に関する基礎的な事柄を学びながら、日本におけるフランス語教育及び言語教育の現状と、これからの言語教育について考える。

講義概要

言語教育の歴史の変遷や、教材、教室活動、評価について、等の理論的側面を紹介する。

そして、教材分析や教案の作成など、グループ作業や個人作業も行う。

テキスト

特に指定しない。

参考文献

必要に応じて、授業で指示する。

評価方法

授業への出席と参加態度、授業中の発表、課題、レポートなどを総合して評価する。

受講者への要望

授業には積極的に参加してほしい。課題や作業を通して、自分自身の教師像を思い描いてください。できるだけ、、の両方を受講してください。

年間授業計画

(順番は、多少、前後することがあります。)

1. Introduction
2. コース・デザイン、シラバス・デザイン、カリキュラム・デザイン
3. 教材分析
4. 教材分析
5. 言語教育における教授法の歴史の変遷
6. 言語教育における教授法の歴史の変遷
7. <授業実践のための準備> (7から10回)
教室活動
8. 教室活動
9. 教材・教具の種類とその選択について
10. 授業実践のための準備、まとめ
11. 評価について
12. まとめ

科目名	(新)フランス語科教科教育法 (後期) (旧)フランス語科教育法
担当者	中村 公子

講義の目標

(実際に教育実習を行うことを前提とするので)

・の内容を活かしながら、教壇に立つための訓練を通して、日本におけるフランス語教育の現状と問題点、また教師にできることを考える。

講義概要

自分で作成した教案に従って、実際に授業を行ってもらい、授業を行う上での困難や問題、その対処法について討論する。

実習は、短時間のものを、最低数回はできるようにする予定。また、人の授業を観察するときの注意点や、よりよい授業を行うために各自ができることについても授業で扱う。

テキスト

特に指定しない。

参考文献

必要に応じて、授業で指示する。

評価方法

授業への参加態度、授業中の発表(実習)、課題、レポートなどを総合して評価する。特に、出欠は厳しくつける。

受講者への要望

授業には積極的に参加してほしい。を受講する人は、必ず も受講してください。

年間授業計画

1. Introduction (準備)

- ・授業観察のために、
- ・実習を行うための心構え。

2 - 11. 実習と討論

12. まとめ

科目名	(新)社会科教育法 (後期)
担当者	秋本弘章

講義の目標

中学校において、社会科を担当するための基礎となる事柄を習得する。(新)社会科教育法では、社会科教育の基本的性格を明らかにするとともに、学習指導要領に基づいて、教科の内容について基本的知識を身につける。

講義概要

社会科成立とその後の変容を追いながら、社会科の特質を明らかにし、今日社会科教育に課されている課題を考える。

中学校学習指導要領に基づき、社会科の教育内容についてできるだけ細かく検討する。

テキスト

とくに指定はしない。

参考文献

文部省「中学校学習指導要領解説(平成10年12月)社会編」大阪書籍

ほか授業中に提示する。

評価方法

中等教員の免許課程であることから、授業参加度を重視する。授業時に出される小課題(レポート)等も重要な評価材料である。

受講者への要望

テキストではないが、文部省「中学校学習指導要領解説(平成10年12月)社会編」は購入し、授業時に必ず持参すること。

年間授業計画

1. 社会科教員の日
2. 社会科成立の背景と意義
3. 社会科の教育課程とその変化(1) 初期社会科から系統化へ
4. 社会科の教育課程とその変化(2) 覚える社会科から考える社会科へ
5. 社会科の今日的課題(1) 国際化と情報化
6. 社会科の今日的課題(2) 環境と人権
7. 社会科教育内容の検討(1) 地理的分野
8. 社会科教育内容の検討(2) 地理的分野
9. 社会科教育内容の検討(3) 歴史的分野
10. 社会科教育内容の検討(4) 歴史的分野
11. 社会科教育内容の検討(5) 公民的分野
12. 社会科教育内容の検討(6) 公民的分野

科目名	(新)社会科教育法 (前期) (旧)社会科教育法
担当者	秋本弘章

講義の目標

中学校において、社会科を担当するための基礎となる事柄を習得する。(旧)社会科教育法、(新)社会科教育法では、社会科の授業実践法を身につける。

講義概要

社会科および地理、歴史、公民の各分野に関して、身につけるべき学力・態度等を踏まえて、その教授法を学ぶ。また、新しい考え方に対応した、情報通信機器の活用法や地域との連携についても考察する。

テキスト

とくに指定はしない。

参考文献

文部省「中学校学習指導要領解説(平成10年12月)社会編」大阪書籍
ほか授業中に提示する。

評価方法

中等教員の免許課程であることから、授業参加度を重視する。授業時に出される小課題(レポート)等も重要な評価材料である。

受講者への要望

テキストではないが、文部省「中学校学習指導要領解説(平成10年12月)社会編」は購入し、授業時に必ず持参すること。

年間授業計画

1. 社会科の目標と身につけるべき力
2. 学習の評価
3. 講義式の授業の特質
4. 教材の収集と利用(1) 新聞や雑誌等
5. 教材の収集と利用(2) 視聴覚教材等
6. 教材の収集と利用(3) 教材化への工夫
7. 生徒主体の学習指導法
8. 調べ学習の指導 図書館等との連携
9. ディベート学習の実践
10. 臨地学習の意義と計画
11. 臨地学習の実践
12. まとめ

科目名	(新)社会科教育法 (旧)社会科教育法 (後期)
担当者	秋本弘章

講義の目標

中学校において、社会科を担当するための基礎となる事柄を習得する。(旧)社会科教育法、(新)社会科教育法では、社会科の年間授業計画および学習指導案の書き方、授業にあたっての望ましい態度を身につける。

講義概要

社会科および地理、歴史、公民の各分野の特色を概観し、年間授業計画について講義する。その後、各分野ごとに学習指導案を作成、模擬授業をおこなう。

テキスト

とくに指定はしない。

参考文献

文部省「中学校学習指導要領解説(平成10年12月)社会編」大阪書籍
ほか授業中に提示する。

評価方法

中等教員の免許課程であることから、授業参加度を重視する。授業時に出される小課題(レポート)等も重要な評価材料である。

受講者への要望

テキストではないが、文部省「中学校学習指導要領解説(平成10年12月)社会編」は購入し、授業時に必ず持参すること。

年間授業計画

1. 学校カリキュラムの中の社会
2. 各分野と特性、内容と年間学習指導計画
3. 地理的分野の指導(1) 内容構成
4. 地理的分野の指導(2) 指導案の作成
5. 歴史的分野の指導(1) 内容構成
6. 歴史的分野の指導(2) 指導案の作成
7. 公民的分野の指導(1) 内容構成
8. 公民的分野の指導(2) 指導案の作成
9. 地理的分野の指導(3) 模擬授業
10. 歴史的分野の指導(3) 模擬授業
11. 公民的分野の指導(3) 模擬授業
12. 3分野の融合と選択社会科の指導

科目名	(新)地理・歴史科教育法 (世界史) (旧)地理・歴史科教育法「歴史」(前期)
担当者	古川 堅 治

講義の目標

「歴史」を教えるということは、常に教える側の歴史観を問われることでもある。その意味で、「歴史」を教える事の「コトの重大さ」を認識する必要がある。それらを前提に現代の歴史学の成果と歴史教育の関連、歴史教育の沿革と具体的な教授法などを取り上げながら、歴史を教える基本的なスタンスを確立することが本講座のねらいである。

講義概要

講義ではプリントを配布しながら概説的に説明していくが、積極的な討論が湧き起こることも期待したい。また、ビデオ上映によって、今、話題になっている教科書論争や諸外国との歴史の共通認識の問題についても考えていきたい。授業は、アット・ホームな雰囲気で行うことに心がけたい。なお後半3回は「模擬授業」の回をもうけ、各回とも1人ずつ(1人50分)それぞれ日本史、世界史どちらの分野でも自分の好きなテーマを選んで「授業」を行なってもらう。

テキスト

特に使用することはない。

参考文献

最初の授業で「参考文献一覧表」を配布するので、適宜、図書館等で参考にする。

評価方法

基本的にはレポート提出により評価するが、出席や議論への参加度合も考慮する。なお、「模擬授業」を希望する人は、その報告・発表をもってレポートの代わりとする。

受講者への要望

教員を志望して授業に臨むはずであるから、個々人が主体的・積極的に授業に参加することを期待する。

年間授業計画

1. 「はじめに ～なぜ歴史を学ぶのか? (歴史学と歴史教育)～」
 - 1) 現在・過去・未来
 - 2) 歴史を学ぶ者の責任と課題
2. 「歴史教育の方法」
 - 1) ビデオ・映像資料を使った学習
 - 2) 史・資料の操作
3. 「歴史教育の方法」

- 1) 人物の採り上げ方
- 2) 地域の学習
4. 「『世界史A』と『日本史A』の扱い方」
 - 1) A科目とB科目
 - 2) 世界史の場合と日本史の場合
5. 「歴史教育におけるヨーロッパ史」
 - 1) ヨーロッパ史教育の今日的意義
 - 2) 「文化圏」学習から「広域的地域世界」学習へ
6. 「歴史教育におけるヨーロッパ史」
 - 1) 国際歴史教科書対話
 - 2) ドイツの例 (VIDEO)
7. 「歴史教育におけるアジア史」
 - 1) 日韓教科書論争 (VIDEO)
 - 2) 日本の「アジア認識」
8. 「歴史教育におけるアジア史」
 - 1) 世界史における東アジアの課題と方法
 - 2) 歴史認識の「共通化」の問題
9. 「まとめ ～歴史のこわざと面白さ～」
 - 1) 歴史のこわざ
 - 2) 歴史の面白さ
10. 「模擬授業」
11. 「模擬授業」
12. 「模擬授業」

科目名	(新)地理・歴史科教育法 (地理) (後期) (旧)地理・歴史科教育法「地理」
担当者	秋本弘章

講義の目標

高等学校における地理教育の目的、内容、方法、課題等について考察するとともに、授業実践上の基礎的な知識・技能の育成を目指す。

講義概要

日本の地理教育史、各国の地理教育を踏まえ、地理で身につけさせるべき見方・考え方、技能について実践的に考察する。

テキスト

とくになし

参考文献

文部省「高等学校学習指導要領解説地理歴史編」
実教出版 ほか授業中に示される。

評価方法

中等教員の免許課程であることから、授業参加度を重視する。授業時に出される小課題（レポート）等も重要な評価材料である。

受講者への要望

テキストではないが、文部省「高等学校学習指導要領解説地理歴史編」は購入し、授業時に必ず持参すること。

年間授業計画

1. 地理教育の目標
2. 日本の地理教育の歩み
3. 諸外国の地理教育
4. 地理的見方・考え方について
5. 地図・地球儀の扱い方(1)
6. 地図・地球儀の扱い方(2)
7. 野外観察・調査の意義と計画
8. 野外観察の実践
9. 新しい学習方法 シュミレーション学習
10. 地理における補助教材の収集
11. 系統地理・地誌・主題的方法の扱い方と学習指導案の作成
12. まとめ

科目名	(新)地理・歴史科教育法 (日本史Ⅰ前期)
担当者	新井孝重

講義の目標

日本史(高校日本史)授業で、とくに教えにくいところを絞って、講義する。

講義概要

- ・律令制の解体
- ・荘園制の成立
- ・荘園制の衰退
- ・荘園制の消滅、太閤検地
- ・中世の封建制と近世の封建制

テキスト

なし。随時プリントを配布します。

参考文献

『100問100答 日本の歴史』3 河出書房新社

評価方法

期末試験で評価する。

受講者への要望

理由のない欠席、極端な遅刻、途中退室はみとめません。

年間授業計画

- 1.〔奈良時代〕新しい土地政策
 - 三世一身法
 - 墾田永年私財法
- 2.律令制支配の後退
- 3.〔平安時代〕荘園の発展
 - 有力農民の経営
 - 荘園の寄進
- 4.荘園の発展
 - 荘園整理の推進
 - 記録所の設置
- 5.〔鎌倉時代〕武家政権の成立
 - 守護地頭の設置
 - 武士の土地支配
- 6.鎌倉幕府の衰退
 - 分割相続
 - 惣領制
- 7.鎌倉幕府の衰退
 - 徳政令
 - 悪党の蜂起
- 8.〔室町時代〕守護大名
 - 半濟令
 - 守護請
- 9.応仁の乱

民衆の成長
土一揆の激発
一向一揆

10. 戦国大名
 - 分国法
11. 戦国大名
 - 鉄砲
 - 信長
12. 封建社会の確立
 - 太閤検地
 - 刀狩

科目名	(新) (旧) 公民科教育法 (前期)
担当者	小川 一郎

講義の目標

学習指導要領（平成元年）改訂によって、高等学校の社会科は再編成され、地理・歴史科と公民科となり、平成 11 年の改訂に引き継がれている。

公民科では、国際化、情報化の進展に主体的に対応できる公民としての資質をもつ主体性のある人間の育成を目指す、十分それを達成できる公民科教育法を身につけさせる。

講義概要

戦前の公民教育が極端な国家主義や軍国主義に基づいたものであったことを認識させ、その反省の上に立って公民教育が出発したことを理解させる。

公民科は、「公民としての資質の育成」を目指しているが、それを達成するための内容、方法について理解させる。模擬授業に 2 時間ほど充てる。

テキスト

小川一郎『在り方生き方指導の理論と実践』清水書院

文部省『高等学校学習指導要領解説公民編』平成 11 年 12 月

参考文献

授業の際に示す。

評価方法

単に、知識、理解をする講座ではないので、出席を重視する。

期末テストかレポート提出。

受講者への要望

実践的指導力を身につけ、充実した学習を行えるように、積極的に授業に出席することを希望する。

年間授業計画

1. 年間の公民科教育法の概要について
特に、前期の公民科教育法の講座の概要について 現代における公民科教育の役割について
2. 公民教育刷新委員会の答申や新教育指針から引き出される戦後公民教育の構想について
3. 公民科教育の意義や目的を正しく理解するための「公民」の概念や「公民としての資質」について
4. 公民科教育の、代表的な指導法や新しい学力観について
5. 平成元年の学習指導要領の社会科の再編成による公民科の誕生について。その理由、社会的背景について。また、社会科の倫理や政経の分野の歴史の変

遷について。さらに平成 11 年の改訂の主要事項について。

6. 公民科の教育目標、内容と構造について、科目「現代社会」の内容構成について
7. 科目「倫理」の目標と内容構成について、「政治、経済」の目標と内容構成について
8. 年間授業計画の作成について
9. 授業の指導案作成について
10. 模擬授業
11. 模擬授業
12. 公民教育が現代において当面するいくつかの課題について

科目名	(新) (旧) 公民科教育法 (後期)
担当者	小川 一郎

12. 公民科教育法についてこれまでの講座の総括。
特に公民科教育法の課題について

講義の目標

公民科教育法 では、目標、内容に対応した指導方法を研究し、実際に模擬授業などを行い、実践的指導力を身に付けさせる。また、表現力や判断力を身に付けさせるため、ディベートの授業など新しい指導方法を開発する意欲と実践力を培う。

講義概要

実際に授業を行う上で必要な指導方法に重点を置いて授業を進め、実際に学生が授業を行って、体験的に身につけるようにする。

実際に、 問題解決学習
グループ学習
ディベート
などを学習する

テキスト

小川一郎『「在り方生き方指導」の理論と実践』清水書院

文部省『高等学校学習指導要領解説公民編』平成 11 年 12 月

参考文献

授業の際に示す。

評価方法

出席状況と提出物を重視
レポート提出

受講者への要望

高校教師を目指す者は必ず受講するように希望する

年間授業計画

1. 公民科教育法 は、公民科教育法 の実践編であること。後期の講座の概要について
2. 新しい学力観における関心・意欲・態度の育成や、表現力、判断力の伸長と問題解決学習について
3. 現代社会の課題設定について
4. 公民科の指導案の作成
5. 作成した指導案について意見交換、講評
6. 模擬授業の実施、自己批判、意見交換、講評
7. 同上
8. 同上
9. 論理的な思考力や表現力を育成する授業方法としてのディベートについて
10. ディベート実施の準備
11. ディベートの実施

科目名	(新)情報科教育法 (前期)
担当者	秋本弘章

講義の目標

高等学校教科としての情報科の目的、内容、方法、課題等について考察するとともに、情報科教員として必要な知識・技能の育成をめざす。

講義概要

情報科成立の背景から始めて、学習指導要領にもどづく情報科の内容を検討し、効果的な教育方法を考える。情報機器の利用方法を身につけると同時に学校におけるコンピュータ室の情報教室、学校全体の情報環境の整備・ネットワーク管理の基礎的な技能の育成も図る。

テキスト

高等学校学習指導要領解説情報編

参考文献

授業中にしめされる。

評価方法

出席状況とレポートによる。

受講者への要望

情報科は新しい教科である。自ら新しいものを作り出す意欲が望まれる。また、実習や課題をこなしながら学習していくので積極的に授業に参加すること。

年間授業計画

1. オリエンテーション(授業の心構え、獨協大学における情報機器の取り扱い方など)
2. 情報科成立の背景
 - 平成元年学習指導要領以前における情報教育
 - 普通教科「情報」新設の経緯と趣旨
 - 専門教科「情報」新設の経緯と趣旨
3. 普通教科「情報」の目指すもの
 - 普通教科「情報」の目標
 - 普通教科「情報」と他教科およびその他の教育活動とのかかわり
4. 普通教科「情報」の科目編成と各科目の特色
 - 普通教科「情報」各科目の目標、内容とその取り扱い
5. 専門教科「情報」の目指すもの
 - 専門教科「情報」の目標
 - 専門教科「情報」と「商業」「工業」その他専門科目との関連
6. 専門教科「情報」の科目編成と内容の概略
 - 専門教科「情報」の科目編成と各科目の特色

7. 情報科教材研究(1)

普通教科情報 A 情報を活用するための工夫と情報機器を題材にして

「情報」授業のオリエンテーションとして位置付け、生徒をひきつける教材の作成について考える。

8. 情報科教材研究(2)

普通教科情報 C 情報の公開・保護と個人の責任を題材にして

「情報」に関するモラルと社会のあり方について考える。(ディベート学習)

9. 情報科教材研究(3)

普通教科情報 A および C 情報の収集・発信と情報機器利用、情報ネットワークを活用した情報の収集・発信および専門教科情報と表現を題材にして

各科目、分野による内容の違いを講義した後、それぞれの教科に合わせた教材の作成実習をおこなう。

10. 情報科教材研究(4)

普通教科情報 B 問題のモデル化とコンピュータを活用した解決 専門教科 モデル化とシミュレーションを題材に

各科目、分野による内容の違いを講義した後、それぞれの教科に合わせた教材の作成実習をおこなう。

11. 情報科教材研究(5)

専門教科 ネットワークシステム に関連して、高等学校に情報教室の設営、校内ネットワークの構築、保守の実務を学ぶ。

12. 情報と社会とのかかわり

情報科の教科内容とも関連させながら、情報授業と学校内外との連携、コミュニケーションの重要性について考察する。

科目名	(新)情報科教育法 (後期)
担当者	秋本弘章

講義の目標

高等学校教科としての情報科の目的、内容、方法、課題等について考察するとともに、情報科教員として必要な知識・技能の育成をめざす。

講義概要

情報科成立の背景から始めて、学習指導要領にもどづく情報科の内容を検討し、効果的な教育方法を考える。情報科教育法では、年間指導計画、学習指導計画の作成、授業参観、模擬授業を予定している。

テキスト

高等学校学習指導要領解説情報編

参考文献

授業中にしめされる。

評価方法

出席状況とレポートによる。

受講者への要望

情報科は新しい教科である。自ら新しいものを作り出す意欲が望まれる。また、実習や課題をこなしながら学習していくので積極的に授業に参加すること。なお、授業見学は相手校の都合等により時間を変更して行う場合がある。

年間授業計画

1. 普通教科「情報」の特性と年間・単元指導計画
情報教育は、「情報科」を中核としながらもすべての学校活動を通じて行われるということを踏まえた年間計画・単元計画の立案について学ぶ。
2. 専門教科「情報」の各科目の配置と相互関連性を踏まえた年間指導計画
専門教育「情報」は複数の科目からなっていることを考慮し、それぞれの科目の特性や学校・生徒の実情に応じた年間計画・単元計画の立案について学ぶ。
- 3、4. 専門教科「情報」学習指導の実際 実践校での授業見学(専門教科)
学校の情報関係施設見学、情報科科目構成、年間授業計画、授業の実際
- 5、6. 普通教科「情報」学習指導の実際 実践校での授業見学(普通教科)
学校の情報関係施設見学、年間授業計画、他教科等関連、授業の実際
- 7、8. 学習指導案の作成

教科「情報」の特性を考慮して、講義形式(普通教室)での授業と実習形式(特別教室)での授業を想定して2種類を作成する。

9. 模擬授業(1)

普通教科 情報 A および C より 情報機器の発達と生活の変化 情報科の進展と社会の変化を題材に

10. 模擬授業(2)

普通教科 情報 B および C より コンピュータの仕組みと働き、情報のデジタル化、情報技術を題材に

11. 模擬授業(3)

専門教科 情報 より 情報実習を題材に

12. 授業のまとめ

科目名	(新) (旧) 道德教育の研究(前期・後期)半期完結
担当者	鳥谷部 志乃恵

提出予定)

講義の目標

人間形成における道德教育の必然性についての理解を深め、学校教育における道德の指導の特質を踏まえながら、「道德の時間」において指導することができるための基礎的な力を養うことを目的とする。

講義概要

次の諸問題について取り扱う。

- ・ 道德とは何か
- ・ 道德をどう教えるか
- ・ こころの発達と道德教育
- ・ 道德教育の歴史
- ・ 学校における道德教育の実践
- ・ 道德の指導案の構想

テキスト

『共にまなぶ道德教育』改訂版 村井実・遠藤克弥編著 川島書店

参考文献

- 『道德教育』 天野貞祐著(天野貞祐全集 第6巻) 栗田出版会
『道理の感覚』 天野貞祐著(天野貞祐全集 第1巻) 栗田出版会
『道德は教えられるか』村井実著 国土新書
『「道德」授業 批判』宇佐美寛著 明治図書

評価方法

評価は授業の中で指示する小レポートの提出と定期試験によって総合的に判断する。

受講者への要望

- 毎回の授業で質問票の提出を義務づけます。
参考文献には目を通しておくこと。

年間授業計画

1. 現代社会と道德教育の課題
2. 道德とは何か
3. 道德は教えられるのか
4. 善さとは何か
5. 道德性の発達について
6. 戦前までの道德教育について
7. 戦後の道德教育について (小レポート提出予定)
8. 学校における道德教育の構造(1)
9. " (2)
10. 「道德の時間」における道德指導の内容と方法
11. 「道德の時間」の指導案の構想(1)
12. 「道德の時間」の指導案の構想(2) (小レポート)

科目名	(新) 道德教育の研究(前期) (旧)
担当者	安井一郎

講義の目標

本講は、今日の学校教育をめぐる問題状況をふまえながら、児童・生徒の人間形成において極めて重要な役割を果たす道德教育の目的、内容、方法及びその今日的課題について考察することを目的とする。

講義概要

道德教育は、人間形成の基礎にかかわるものであり、人間が社会の中で人間として生きていくために不可欠の内容を有している。それゆえ、学校教育においては、知識・技術の教育とともに、道德教育が2本の柱として重要な役割を果たしてきた。本講では、道德教育の意義と目的、学校教育における位置と役割についての基本的な理解を得たうえで、道德について考えるうえでの基本的な問いを「教育において生命のもつ意味は何か」と捉え、その観点から、今日の道德教育の現状を分析し、その特徴と問題点を明らかにし、一人ひとりの子どもの「生きる力」の育成に資する道德教育とは何かについて検討を加える。

テキスト

未定

参考文献

講義の中で紹介する。

評価方法

出席、レポート、試験による総合評価

受講者への要望

レポートや感想文を数回提出してもらう予定である。講義の中で紹介する文献には、できるだけ目を通すことを望む。

年間授業計画

1. 自分の道德教育体験をふり返る
2. 道德とは何か
3. 学校教育における道德教育の位置と役割(1)
4. " (2)
5. 道德教育の歴史的変遷(1)
6. " (2)
7. 教育における生命の意味
8. 生命に対する畏敬の念(1)
9. " (2)
10. 学習指導案の作成(1)
11. " (2)
12. 道德教育の今日的課題

科目名	(新) (旧) 特別活動(前期)
担当者	佐藤利明

等)と対応
12. 特別活動の展望
レポート課題提示

講義の目標

学習指導要領についての理解。
特別活動の目標及び基本・指導理念を知る。
特別活動は学校教育目標達成に具体的に作用し、生徒の人間形成に重要な領域であることを理解する。

講義概要

学習指導要領の必要性和法的根拠。
学習指導要領教育課程編成の一般方針1について。
特別活動の変遷及び特質と目標。
生徒の自発的・自治的活動の重みを知り、育成する具体例。
学級経営、学級活動での教師と生徒の信頼関係及び生徒相互の好ましい人間関係の育成。
生徒会活動、学校行事、体験学習。
評価と課題。

テキスト

中学校，高等学校 学習指導要領解説 特別活動
編 文部省。
指導案等プリント配布。

評価方法

定刻出席とレポート評定(課題 最終時提示)

受講者への要望

「指導者」を目指す意識を強くもち受講する。
止むを得ず欠席の場合は欠席届と作文(課題はその都度指示)をすみやかに提出する。

年間授業計画

1. 期中の講義概要説明
学習指導要領の必要性和法的根拠 教育課程編成の一般方針1(新・旧)と特別活動。
2. 学校教育目標と特別活動 教師の助言指導援助 授業時数(新・旧)
3. 特別活動の変遷 学校生活の充実・向上(討議含)
4. 学級活動 指導案
自主的 自発的 自治的活動の理論と実際
5. 所属感・存在感・成功感・充実感を味わわせる具体的指導(討議含)
6. 教育相談・進路指導
7. 生徒会活動の実際 体験学習 指導案
8. 学校行事の実際及びクラブ活動
9. 学級・学年・学校経営と特別活動
10. 家庭・地域と特別活動
11. 今日の課題(いじめ 登校拒否 基本的な生活習慣

科目名	(新) (旧) 教育方法学(前期)
担当者	町田喜義

講義の目標

「教育の方法と技術」という視点から検討し、各自の教育方法のイメージを作り上げる。

講義概要

人間の一生は、(1)日常の様々な直接経験、(2)本、TV、映画などによる間接経験、そして(3)言語による理性的・感性的経験を通しての成長過程であると言える。この三つの経験システムをどのように教育過程で生かすかを考えてみたい。「どの様に教えるかは」、「何を教えるか」と同様に重要な教育の課題である。これには諸君が、今、そして今後「何を学ぶか」、「学んだ結果として諸君がどう変わるか」が関わっている。

テキスト

使用しない：その都度教材を配布する。

参考文献

開講時に配布する。

評価方法

課題レポート：40%（提出遅れ、指定用紙以外は受理しない）

定期試験：45%

出席回数：15%（欠席1回につき2点減点 やむを得ず欠席をした場合は証明書を提出する事、遅刻は1点減点）

受講者への要望

グループ討議をするので意見交換の場では積極的に発言・貢献すること。

年間授業計画

1. 「コミュニケーション」の概念を理解する。
2. 「コミュニケーション」と「教育・学習」の関係を理解する。
3. 「メディア」の概念を理解し、「学習情報」との相互作用を理解する。
4. 教育メディアの機能、種類、利用等を理解する。
5. 教育をコミュニケーション分析する。
6. 教師論を討論する。
7. 教材研究とは何か。
8. 授業を設計する。
9. 言語と非言語の機能の相違を知る。
10. 「評価」と「測定」の概念と関係を理解する。
11. 学習における報酬、コミュニケーションのフィードバックを考える。

12. 各自の教育方法のイメージを描く。

講義内容と開講日については別紙配布するが、内容は昨年度の「授業改善アンケート」結果を参考にして変更する場合がある。

科目名	(新) (旧)教育方法学(前期・後期)半期完結
担当者	安井一郎

講義の目標

本講は、今日の学校教育、とりわけ授業をめぐる問題状況をふまえながら、教育方法の研究、実践に関する今日的な課題について考察することを目的とする。

講義概要

毎日の授業をどのように工夫したらよいか、子どもたちの個性を最大限に生かせるような指導とは何か等の問いに代表されるように、授業の内容とその方法に関する諸問題は、学校教育における最も重要な課題の一つである。本講では教育方法学のうち、特に授業研究の問題に焦点をあて、授業研究を行ううえでの基本的な考え方はどのようなものであるのか、授業を成り立たせている構成要素は何か、授業を展開する具体的な方法とは何か等の問題について、テキスト、配布資料、VTR による実際の授業記録などを用いながら多面的に検討を加え、授業研究に関する理解を深めていく。

テキスト

未定

参考文献

講義の中で紹介する。

評価方法

出席、レポート、試験による総合評価

受講者への要望

レポートや感想文を数回提出してもらおう予定である。講義の中で紹介する文献には、できるだけ目を通すことを望む。

年間授業計画

1. 自分の授業体験をふり返る
2. 授業とは何か
3. 教材研究とは何か
4. 教材研究の事例の検討(1)
5. " (2)
6. 授業を構成する要素
7. 授業を創る技術(1)
8. " (2)
9. 授業における教師 - 生徒関係
10. 特徴ある授業実践例の検討(1)
11. " (2)
12. 授業の評価
13. 授業研究の今日的課題

科目名	(新) 生徒指導法(前期) (旧) 生徒指導法(前期)
担当者	小川 一郎

11. 進路指導の実践的展開

12. 生徒指導、進路指導の組織と運営

講義の目標

生徒指導は、生徒のそれぞれの人格のより良き発達を目指すとともに、学校生活が生徒にとって充実したものになるようにすることを目的とする。そのためには、それぞれのもつ個性を伸長し、自己実現を図り、進路を主体的に選択決定できる資質能力を育成するために、教師は生徒一人一人を理解し、指導・支援する必要がある。そのような教師の生徒指導の役割を理解するとともに、生徒指導の実践的指導力を育成することを目的とする。

講義概要

生徒指導、進路指導の意義と課題
人間の成長、発達についての理解
問題行動の理解と指導法
ガイダンスの意味と役割
生徒指導、進路指導の組織と運営

テキスト

小川 一郎
中野目直明 編著「現代の生徒指導」文教書院

参考文献

授業の際に示す。

評価方法

出席状況
レポート提出

受講者への要望

授業に積極的に出席する。

年間授業計画

1. 生徒指導、進路指導の意義と性格
2. 生徒指導、進路指導の学校における位置付け
3. 生徒指導の課題
人間関係の改善と望ましい人間関係の促進
基本的生活習慣の改善など
4. 進路指導の当面する課題
偏差値、進路適性と進路
5. 人間としての在り方生き方と生徒指導、進路指導
6. 生徒指導と生徒理解の方法と技術
7. 進路指導と自己理解、個性の発見
8. 問題行動の理解と指導
いじめ、暴力、キレる生徒
9. 問題行動の理解と指導
不登校、中途退学、その他
10. 教育相談、進路相談、ガイダンス

科目名	(新)生徒指導法(前期・後期)半期完結 (旧)生徒指導法(前期・後期)半期完結
担当者	佐藤利明

講義の目標

生徒指導・進路指導は、学校教育において生徒一人ひとりが生きがいをもって充実した学校生活ができるようにすることである。

生徒の一人ひとりが基本的な生活習慣を身につけ、個性の伸長をはかる等資質・生活態度の育成を目指す。

人間形成のうえで重要な機能をもっていることと、その具現化をはかることの理解。

講義概要

生徒指導の意義、原理及び機能論。

進路指導の理念、意義と背景、基本的性格。

生徒理解の意義と方法及び留意点。

個別指導・集団指導、非行及び問題行動の対応。

教育課程と生徒指導・進路指導。

教育相談、地域社会との連携。

学校教育目標との関連、全教職員の共通理解。

総合的な学習の時間。

テキスト

プリント配布。

評価方法

定刻出席とレポート評定(課題 最終時提示)

レポート提出 教務課一係あて。

受講者への要望

止むを得ず欠席の場合は、事前に欠席届と論作文(課題はその都度指示)を提出する。事後の場合はすみやかに同様提出する。

年間授業計画

1. 講義概要説明(生徒指導・進路指導)

生徒指導の意義、原理及び機能論

生徒指導は時代の変遷でどう変わったか

2. 学校教育目標と生徒指導及び指導体制・学級・学年経営

教育課程と生徒指導

3. 生徒指導の実際

生徒理解の考え方とその実際及び留意点

教師と生徒の信頼関係、生徒間の好ましい人間関係育成のための具体的努力点

4. 個別指導(教育相談)、集団指導

5. 非行・問題行動の事例と討議 指導方法

6. いじめ・登校拒否・地域社会との連携の事例討議

7. 生徒指導をめぐる諸問題と対応

8. 進路指導の理念

意義とその背景、基本的性格、青年期の発達課題等

9. 進路指導の充実

第1章第6の2(4)を中心として

進路指導の諸活動

10. 進路指導と教育課程

特に特別活動との関連

11. 進路相談のすすめ方

資料活用を中心とした援助・助言・指導

12. 生徒指導と進路指導

生徒指導と総合的な学習の時間との関連

レポート課題提示

科目名	(新)学校カウンセリング(前期)
担当者	瀧本孝雄

講義の目標

まず初めにカウンセリングについての理論、技法等について全般的に学習する。

次に学校カウンセリングの目標と方法に関して具体的に学習する。特にいじめ、校内暴力、非行、情緒障害等について、教育相談との関連において考察していく。

さらに心理テストについて概説し、カウンセリングにおける心理テストの役割を考察したうえで、実際に心理テストを実施する。

講義概要

学校カウンセリングの問題を考察する前に、まずカウンセリングとは何かということについて全体的な知識を深める。

次に、それをもとに、学校でカウンセリングをどのように利用し、それによって生徒にどのような意味や効果があるかについて他方面から検討していく。

それらをふまえて、現在学校で問題となっている事柄、あるいは生徒自身の悩みを具体的にどのように解決していくかを考察する。

テキスト

「新版カウンセリングと心理テスト」林潔他著、ブレーン出版

評価方法

評価方法は講義、グループ・ワークに関しての小テスト、レポートおよび出席状況による。

受講者への要望

出欠席は毎回とるので、欠席しないこと。

年間授業計画

1. カウンセリングの目的とその意義
カウンセリングとは何か、どのような意義と効果があるか等について考察する。
2. カウンセリングの理論
カウンセリングに関するさまざまな理論について比較検討する。
3. カウンセリングの技法
カウンセリングの技法について具体的な例をもとに講義する。
4. 学校カウンセリングの目的と特色
教育におけるカウンセリングと生徒相談の意義について考察する。
5. 学校カウンセリングの方法

学校場面におけるカウンセリングの基本的実習を行う。

6. 中学生・高校生と学校カウンセリング

学校カウンセリングの現状と学校カウンセラーの役割について考察する。

7. 生徒の問題行動

非行、いじめ、登校拒否など現在学校で問題になっている行動について講義する。

8. 生徒の精神衛生

神経症、精神病、自殺などについて考察する。

9. 現代青年の悩み

現代青年の悩みを構造的に理解する。

10. 青年期の人間関係

青年期の友人関係、親子関係、恋愛、性の諸問題について検討する。

11. 心理テストの理論

心理テストの中で、知能テスト、性格テストの理論と種類について講義する。

12. 心理テストの実施

性格テストを実際に実施し、自己理解を深める。

科目名	(新)学校カウンセリング (前期・後期)半期完結
担当者	林 潔

講義の目標

教育現場にも、いわゆる心の問題が積極的に取り上げられるようになりつつあります。知識の伝達と思考能力をのばす活動であったとしても、情緒の問題への対応を避けることはできません。また生徒が自分が直面する問題の解決の方法を身につけることも大切です。

生徒の問題にどう関わるのか、その基本的な方法について紹介します。

講義概要

悩みは、悩ますもの (stressor) と悩む人の2つの条件に分けて考えられます。

カウンセリングはこの悩む人への援助です。この活動には、治療・予防・開発の3つの役割があります。従っていわゆるまづい問題をもっている生徒だけに対する活動ではありません。

このようなことを前提として、一般に活用されている方法、来談者中心カウンセリングと認知行動療法の基礎と方法について紹介します。

来談者中心カウンセリングはカウンセリングの基礎でもあり、また、気持の問題に対するアプローチとしても有効です。認知行動療法は抑うつの治療の方法としても知られていますが、生徒の日常的な問題への対応に役に立つと思います。

参考文献

随時提示します。

評価方法

期末試験を主とします。レポート、平常点を考慮することがあります。また教職科目なので、授業出席も単位取得の条件です。レポート、質問は下記のE-mailを利用されてもよいです。

受講者への要望

積極的に質問して下さい。質問などあとから思いついたら E-mail (hayashi@shiraume.ac.jp) を使って下さい。交流のある授業にしたいです。

年間授業計画

1. カウンセリングの役割

カウンセリングは基本的に話し合い治療です。話をすること、さらには一緒にいることにどのような意味があるのでしょうか。

また教育の領域におけるカウンセリングの特徴についてとりあげます。

2. さまざまなカウンセリング

「人を援助することは理屈ではない」と考えることももっともです。しかし人に対する働きかけには、それぞれ前提となる行動変化のモデルがあります。これをきっちり押さえておかないと、やがて自分の活動に疑問が出てきかねません。

人格中心の取り組み、問題中心の取り組みについて、その長所と限界について考えます。

3. 受理面接の役割

来談者すなわち相談に来た人の問題の把握の方法を紹介します。

4 - 6. 来談者中心カウンセリングについて

人格中心の取り組みとして、戦後のわが国のカウンセリングの分野に対して大きな影響を与えたロジャースのカウンセリング論とその方法について紹介します。

7. 行動療法と認知行動療法

問題中心の取り組みの代表的なものが行動療法です。行動療法では、人間の行動は学習すなわち経験によって形成されると考えます。ここでは行動療法の、全般的特徴について説明します。

8. カウンセリングにおけるテスト、チェックリストの利用

特に行動療法の場合、人間の問題を客観的に理解するというのが基本です。そのため必要に応じて、心理テストやチェックリストが使われます。その一部について紹介します。

9 - 12. 認知行動療法について

人間の思考や理性も行動に影響を与えます。もちろんすべてではありませんが、感情障害 (気持の問題) の前提に認知障害 (考え方の問題) が存在する場合があります。日常的な行き違いや悩みは、結構こうして生まれることが少なくありません。このようなレベルの問題を扱うのが認知行動療法です。ベックの認知療法、エリスの REBT (論理療法、合理情動療法などといわれます)、マイケンバークのストレス免疫訓練を中心に、この原理と方法について紹介します。

科目名	(新)学校カウンセリング(後期)
担当者	森川正大

講義の目標

「不登校」、「無気力」、「いじめ」、「自殺」、「非行」、「暴力」など、学校教育現場における問題の増加は、我が国の社会問題とまでなっている。こうした状況に対応するためスクール・カウンセラー制度が発足したが、まだ緒についたばかりである。

学校カウンセリングは、専門カウンセラーのみならず、教科担当の教師にとっても重要な課題であり、生徒指導や学級運営の面でも有効である。この科目は、中・高の教育職員に必要な「学校カウンセリング」の基礎的知識を身につけることを目標とする。

講義概要

授業回数に限られているので、カウンセリングの理論については、できるだけ時間外の文献学習に委ね、教室においては、学校カウンセリングの実際について事例を交えながら講義するようにしたい。カウンセリングの技法等については、体験学習もとり入れる。

内容の概要は、以下のとおり。

学校カウンセリングの課題 教師と学校カウンセリング 生徒理解と援助のポイント 生徒の諸問題 カウンセリングの理論と技法 学校カウンセリングと心理テスト 保護者への援助

校内組織その他の活用と連携

テキスト

テキストは用いない。プリントによる。

参考文献

『学校カウンセリング』國分康孝編 日本評論社

『カウンセリングとは何か』平木典子著 朝日新聞社

その他、そのつど指示する。

評価方法

出席を重視する。毎回、「ふりかえり(質問・感想)」用紙の提出を求める。

レポートによる。試験は行わない。

受講者への要望

一方的な講義でなく、かかわり合いのある授業としたいので積極的参加を期待する。第1回授業の際「履修者に関するアンケート」をとる。

遅刻は減点する。

年間授業計画

1. 学校カウンセリングの課題

2. 教師と学校カウンセリング

3. 生徒理解と援助のポイント(1)

4. 生徒理解と援助のポイント(2)

5. 生徒の諸問題：事例の紹介

6. カウンセリングの理論と技法(1)

7. カウンセリングの理論と技法(2)

8. カウンセリングの理論と技法(3)

9. カウンセリングの理論と技法(4)

10. 学校カウンセリングと心理テスト

11. 保護者への援助：コンサルテーションとカウンセリング

12. 校内組織その他の活用と連携/まとめ

科目名	(新)総合演習(前期・後期)半期完結
担当者	鳥谷部 志乃恵

講義の目標

小、中、高等学校の教育課程に導入された総合的な学習の時間についての目的、内容、方法等についての理解を深め、個別教科の枠を超えて指導することができるための経験カリキュラムや問題解決学習法を実践的に学習することを目的とする。

講義概要

- ・総合的な学習の時間の目的、内容、方法についての基本的な理解
- ・現代社会の抱える課題について具体的な事例を通して考察する
- ・問題解決法について実践的に学習する

テキスト

特になし

参考文献

必要に応じて指示する

評価方法

出席、発表、レポート提出等によって総合的に判断する。

受講者への要望

問題を見つけ、自ら調べ、発表し、レポートを作成するという実践的な学習活動が必要となるため積極的な態度で参加すること。

年間授業計画

1. 総合的な学習の時間の趣旨と今日の学校教育における意義
2. 総合的な学習の時間の内容と方法について
3. グループ編成と研究テーマの設定に関わる考察
4. 研究テーマの決定と発表
5. グループワーク
6. グループワーク
7. グループワーク
8. グループワーク
9. グループワーク、グループ討議
10. 研究成果の発表
11. 研究成果の発表
12. 発表をもとにしたグループ討議と全体討議

科目名	(新)総合演習(後期)
担当者	安井一郎

- 6. " (2)
- 7. " (3)
- 8. " (4)
- 9. " (5)
- 10. グループ研究(6)
- 11. 研究成果の発表(1)
- 12. " (2)

講義の目標

本講は、小・中・高の教育課程に新たに設けられた総合的な学習の時間において行われる教育活動の内容、方法及びその今日的課題について考察することを目的とする。総合的な学習の時間は、既存の各教科・領域だけでは十分に扱うことのできない現代社会の諸問題に関する横断的、総合的な学習や、児童生徒の興味関心に基づく学習を目的とし、各学校では、地域や学校、児童生徒の実態等に応じて、創意工夫を生かした教育活動を行うことが求められる。本講では、このような認識に基づいて、「諸外国についての理解を深めるの方法」という講義題目を設定し、国際理解を主たる柱とする総合的な学習の研究及び実践を行う。

講義概要

本講は、次のような内容で進められる。まず、総合的な学習の時間の趣旨、ねらい、教育的意義、学習方法、他の教科・領域との関係等についての基本的理解を深める。続いて、講義題目に基づいて、外国についての理解を深めるということはどういうことなのか、そのためのアプローチの仕方にはどのようなものがあるかについて話し合う。(例えば、食文化、音楽や踊り、国旗、国歌、スポーツ etc.) 次に、具体的に研究の対象とする国及び研究テーマを決定する。各テーマごとにグループを編成し、総合的な学習の時間の学習方法に基づいて、実際に総合的な学習の実践を行う。

最後に、グループごとに学習の成果をまとめ、発表する。本講は、学習の性格上、授業時以外の調査、見学、討論などの体験的な諸活動が不可欠である。

学生諸君の積極的な参加を希望する。

参考文献

未定

評価方法

出席、課題、レポート等によって総合的に評価する。

年間授業計画

1. 総合的な学習の時間の意義とねらい
2. 総合的な学習の時間の学習内容と学習方法
3. 国際理解教育の課題
4. 研究テーマの決定とグループ編成
5. グループ研究(1)

科目名	(新)総合演習(前期)
担当者	秋本弘章

講義の目標

人類のかかえている課題について、多面的な視点から分析・検討する能力を養うとともに、これらの課題について個別教科の枠を超えて総合的な時間で扱う方法を考える。

講義概要

人類のかかえている課題はおおくあるが、身近な問題を事例としながら考えていく。講義というより受講者が各自分擔されたテーマを調べ、様々な形で発表するという形式で進める。

テキスト

特になし

参考文献

授業中に個別に示される。

評価方法

出席、プレゼンテーション、レポート等を総合的に判断する。

受講者への要望

自ら調べ、発表するという形で進めるので、受講者は積極的な態度で臨むこと。

年間授業計画

1. 学校教育における総合的な学習
2. 獨協大学から世界の課題を考える(1) 環境
3. 獨協大学から世界の課題を考える(2) 国際化
4. 獨協大学から世界の課題を考える(3) 福祉
5. 獨協大学から世界の課題を考える(4) 人権
6. 獨協大学から世界の課題を考える(5) 情報
7. 草加市を調べる(1) 環境
8. 草加市を調べる(2) 文化
9. 草加市を調べる(3) 暮らし
10. 草加市を調べる(4) 経済と社会
11. 草加市を調べる(5) 交流
12. 獨協大学・草加市から世界をみる

科目名	(新)総合演習(前期・後期)半期完結
担当者	渋谷英章

9. グループ討議・発表の準備
10. 最終発表
11. 最終発表
12. 発表をもとにしたグループ討議

講義の目標

現代的な課題の中から、「国際理解」をとりあげ、資料収集、討議、発表などを通じて具体的な事例の検証をすることによって、国際社会における教育の在り方や課題についての理解を進める。

また、情報収集・情報検索やグループ学習の方法、プレゼンテーションの技術などについて、自ら体験することを通して、総合学習の指導方法を修得する。

講義概要

「国際理解」の基本的課題について提示する。

「世界の子どもたちと日本の子どもたちの比較」を課題とし、学生各自が興味関心に応じてひとつの地域を選び、地域ごとにグループを編成する。

グループごとに、情報収集を行い、その資料・情報をもとに討議をすることによって、各グループの選択した地域の子どもたちの現状と問題点を明らかにし、日本の子どもたちの現状と比較検討する。

グループごとに検討の成果を発表する。

その発表をもとに、再編成したグループで討議を行う。

テキスト

とくになし

評価方法

グループによる発表と各自の感想レポートをもとに、出席状況などを考慮して評価する。

受講者への要望

書籍などの資料に頼るのではなく、関係機関の訪問、関係者へのインタビュー、あるいはインターネットのホームページや電子メールによる情報収集などを心がけてほしい。

年間授業計画

1. オリエンテーション/グループ編成と研究計画作成
2. 研究計画発表
3. グループワーク
4. グループワーク
5. 中間発表
6. グループワーク
7. グループワーク
8. グループ討議

科目名	(新)教育実習論(事前・事後指導) (後期) (旧)教育実習 (教育実習の事前・事後指導)
担当者	鳥谷部 志乃恵

講義の目標

教育実習の意義や目標、内容及び方法について理解を深め、効果的で充実した教育実習が体験できるための事前指導としての予備的で実際のな学習を目標とする。

講義概要

次の事項について取り扱う。

- ・教育実習の意義、目的
- ・教育実習の内容と方法
- ・学校の組織と運営
- ・実習生としての心得とサービスの在り方
- ・授業への取り組みの方法と指導案作成

テキスト

教育実習の指針(獨協大学)

参考文献

必要に応じて指示する。

評価方法

出席とレポート(指導案等)の提出を求め総合的に評価する。

受講者への要望

教育実習の事前指導であるから原則的に欠席は認められない。止むを得ない事情によって欠席せざるを得ない場合は欠席届とレポート提出を求める。

年間授業計画

1. 教育実習の意義・目的について
2. 教育実習の形態(観察・参加・実習)について
3. 学校の組織と運営について
4. 教育実習生としての心得とサービスの在り方
5. 教育実習の内容と方法(各教科、特別活動、道徳、総合的な学習の時間等)
6. 授業への取り組み(教材研究の方法)
7. 授業への取り組み(指導案の構想、発問や板書、教具の工夫、授業形態の工夫)
8. 指導案作成作業
9. 指導案作成作業
10. 指導案作成作業
11. 指導案作成作業 と模擬授業
12. 指導案作成作業 と模擬授業

科目名	(新)教育実習論(事前・事後指導) (後期) (旧)教育実習 (教育実習の事前・事後指導)
担当者	安井 一郎

講義の目標

本講は、教育実習の意義や目的、その概要を理解するとともに、学習指導案の作成、基礎的な指導技術の習得、模擬授業等を行なうことにより、教育実習に向けての準備を進めることを目的とする。

講義概要

教育実習は、これまで大学の教職課程で学んできたことの成果を、実習校での学校運営に教育実習生として直接参加することによって、具体的に実証する機会である。本講では、教育実習の事前指導として、教育実習に参加することの意義や目的、実習期間中の学校生活の概要を理解するとともに、学習指導案の作成、基礎的な指導技術の習得、模擬授業等を体験することにより、実習における学習のポイントを明確にする。また、実習生としての心がまえ、実習期間中の留意点等についても触れ、教育実習に関する理解を深めていく。

テキスト

『教育実習の指針』(獨協大学)

参考文献

講義の中で紹介する。

評価方法

出席、レポートによる。

受講者への要望

教育実習の事前指導であり、原則として欠席は認められない。実際の教育実習を想定し、真剣な態度で受講することを望む。

年間授業計画

1. 教育実習とは何か
2. 教育実習の概要
3. 学校の組織と教師の職務
4. 教材の研究
5. 学習指導案の作成(1)
6. " (2)
7. 発問
8. 板書
9. 生徒とのコミュニケーション
10. 模擬授業(1)
11. " (2)
12. 教育実習期間中の諸注意

科目名	(新)教育実習論(事前・事後指導) (後期) (旧)教育実習(教育実習の事前・事後指導)
担当者	小川 一郎

講義の目標

教育実習について、その概要を理解し、目的意識をもつてのぞめるようにする。そのため教育実習の意義や目的について、十分に理解させる。

実習校に新風を吹き込み生徒に刺激を与えるために、実習にのぞむ心構え、生徒とのコミュニケーションのとり方などを重視し、授業を進める。さらに実習期間における仕事の内容を理解させ、十分に事前の準備ができるようにする。

講義概要

教育実習の意義・目的について

教師の仕事の性質について

(教師と生徒の関係など)

教師の資質とその形成について

実習にのぞむための目的意識とその心構え

教壇実習の準備について

学校の仕事の内容について

学校の現代的課題について

実習生の立場について

テキスト

「教育実習の指針」(獨協大学)

参考文献

小川一郎編著『ホームルーム担任読本』文教書院

評価方法

評価はレポートと授業への参加を考慮して決定する。

受講者への要望

教育実習の事前指導なので、講座に出席することが大切である。教育実習が間近に迫るといろいろ不安や疑問をもつようになる。十分な準備と心構えをつくる必要がある。適宜、個人指導する。

年間授業計画

1. 教育実習 ・ が制度化された意義や目的について、また、この講座の概要について
2. 教師の仕事の性質、教師の資質について
3. 教育実習の意義・目的について 先輩実習生の感想、意見などについて
4. 教育実習全般の事前の準備や実習校との連絡、実習期間、事後の対応。心得と準備について
5. 教育実習の形態、(1)観察、(2)参加、(3)教壇実習について
6. 教育実習の仕事の内容、学校の教育活動の概要に

ついて

7. 研究授業への対応、教材研究について、特に、教材研究には多くの時間を必要とするので、その自覚と心構えについて
8. 学級担任としての学級経営と学級経営上の諸問題について
9. 学級担任としての生徒指導、進路指導について、最近、いじめ、登校拒否(不登校)、高校中途退学など対応のむずかしい問題が増加しているのでその対応について
10. 生徒理解の方法と生徒とのコミュニケーションについて
11. 教師として義務づけられている研修と法規について 教師としての服務や勤務など、必要な法規について
12. 教育実習の記録、反省など教育実習日誌の記録や毎日の指導教官との報告、連絡、相談について

科目名	(新)教育実習論(事前・事後指導) (旧)教育実習(教育実習の事前・事後指導)(後期)
担当者	佐藤利明

講義の目標

教育行政のしくみ、公立・私立学校。
 学習指導要領・教育課程の基本的事項。
 教師の学校での勤務状況を知る。
 生徒と教師、生徒と生徒の信頼関係よい人関係をつくる工夫。
 一層充実した感動ある教育実習に資する。
 先輩の教育実習を終わりの感想と意見。

講義概要

教育実習の意義。
 都道府県・市町村教育委員会と学校(政令都市含む)教職員の採用・服務監督。私立学校。
 教職員としての専門性。
 学習指導要領のねらい。
 総合的な学習の時間について。
 よい授業をするための研究。
 教師の一日。職員会等各会への参加の心構え。
 学校教育の今日的課題とその対応。
 先輩の実習後の感想と意見。

テキスト

「教育実習の指針」(獨協大学)
 プリント配布。

評価方法

定刻出席とレポートの評定(課題 最終時提示)

受講者への要望

「指導者」を目指す意識を強くもち、充実した教育実習ができるよう意欲をもって受講する。止むを得ず欠席の場合は欠席届と論作文(課題はその都度掲示)をすみやかに提出する。

年間授業計画

1. 講義概要説明。
 学校教育に関する関係法規の概略。
 都道府県・市町村教育委員会と公立学校。私立学校。教科書。
2. 教育職員の専門性(教職観、教師像、研究修養、授業等)。学習指導要領のねらい。
3. 総合的な学習の時間の主旨・ねらい・学習活動等。
 教育課程編成。目的と目標。
4. 年間授業計画と学習指導案。指導案のいろいろ(様式、内容)。
5. よい授業をするための教材研究と指導案のたてかた。

6. 指導方法、達成感・成就感等を味わわせる指導。
 学習形態。

発問、板書事項、チョークの使い方、机間指導等。
 評価とその活用。

7. 生徒指導(特に心の教育等)。生徒理解、教育相談、進路指導、同和教育。学校事故。

8. 道徳教育のねらい。資料準備及び指導案。

9. 特別活動のねらい特に学級活動の指導の実際。

短学活の活動の指導。

10. 教師の一日 模擬授業(学級活動)

11. 職員会、学年会、教科会、朝の打合せ等への参加の心構え。校務分掌

12. 教育実習へ臨むことのまとめ。学校教育の今日的課題の討議と展望

先輩の教育実習後の感想と意見

レポート課題提示。

科目名	(新)日本史概説 (古中世) (前期) (旧)日本史概説(通年)
担当者	新井孝重

講義の目標

古代から中世の変革の「法則」を具体的な歴史叙述をたどるなかで学びとる。歴史を理論的、哲学的に学びたい。

講義概要

戦後歴史学の主要な学説は、領主制理論というもの为主軸になっている。奴隷制的経済制度を揚棄して、新たな経済制度である農奴制が形成されるが、そうした変革期中世農村のすがたを、村落共同体、武士団、荘園制などの歴史事項を通して学ぶ。

石母田史学に内在する「人間」の問題を考える。

テキスト

なし

評価方法

評価は、前期の定期試験の成績と出席状態にもとづいておこなうものとする。

受講者への要望

大幅な遅刻のばあいは、入室を遠慮してもらいたい。(佳境へ入ったところで授業が攪乱されるから)

年間授業計画

1. 第1回目の授業。石母田正著『中世的世界の形成』という書物のあつかうテーマ、叙述の構成を紹介して、これを読書することの学問的意義を論ずる。
2. 第1章 藤原実遠(私営田領主の没落)
3. 第2章 東大寺(荘園領主の古代的性格)
4. 第3章 源俊方(農村の領主)
5. 第4章 黒田悪党(領主制の敗北)
6. 『中世的世界』の「道德」と「頽廢」
7. 歴史学における「人間」の系譜
8. 文化史学と西田直二郎について
9. 京都大学と近代学芸について
10. 戦時国家主義と近代学芸の抵抗
11. 「人間」の叙述・中村直勝の場合
12. 「人間」の叙述・石母田正の場合

科目名	(新)日本史概説 (近現代)(後期) (旧)日本史概説(通年)
担当者	駒田和幸

9. ラジオ体操(1)
10. ラジオ体操(2)
11. 健康優良児をめぐって(1)
12. 健康優良児をめぐって(2)

講義の目標

後期は日本近・現代史を講義していくが、その際ひとつの足場を設定し、そこから考察していくという方法をとりたい。その足場は現代に生きる私の問題意識とその時代の人びととのせめぎ合いの場である。たとえその足場がどんなにささやかなものであっても、日本近・現代史の特質の一端を見わたす、つまり「概説」していくことができればと考えている。

また、教職志望者に裨益するところがあれば幸いである。

講義概要

今年度は、足場として健康というテーマを設定したい。今日、人びとは健康のため努力を惜しまないだけでなく、多くのコストをかけている。「健康のため」ということばは明らかに反論するのがきわめてむずかしいものとなっている。スーザン・ソントグが「現代人が何かの行為の動機として理解できるのは金銭、快楽、健康の三つである」という通りである。ところで健康がこのように疑いをいれなものとなってきたのは、いつごろからだろうか。日本の近・現代史のなかで、この問題をさぐっていきたいと考えている。

テキスト

特に定めないが、授業に際して資・史料をプリントして配布する。

参考文献

授業中に随時紹介していく。

評価方法

筆記試験と出席状態にもとづいて行う。

受講者への要望

高等学校程度の「日本史(近・現代史)概説」を見直ししておいてもらえると助かる。

年間授業計画

1. 養生から健康へ(1)
2. 養生から健康へ(2)
3. 養生から健康へ(3)
4. 福沢諭吉の健康観(1)
5. 福沢諭吉の健康観(2)
6. 体操のおこり(1)
7. 体操のおこり(2)
8. 体操のひろまり

科目名	(新)外国史概説 (東洋史) (後期) (旧)外国史概説
担当者	兼田 信一郎

9. 漢帝国の崩壊と社会の流動化
10. 専制支配の再編と貴族制社会
11. 唐帝国の成立
12. 唐帝国の変質と崩壊

講義の目標

中国の歴史、特に秦漢～隋唐期を概観する。21世紀は中国の時代となるという声をよく耳にするが、近年の急激な経済発展は確かにそうした見方の論拠になるものである。しかし、この中国社会は、日本とは全く異なる社会と言える。講義では前近代中国の史的展開を概観しつつ、伝統中国社会の特殊性について考えてみたい。

講義概要

歴史をみつめる起点は常に現代にある。そこでまず現代中国の概況を資料を用いて紹介し、現代中国のかかえる諸問題に焦点をあて、「伝統」がどのような歴史的推移の中で生み出されてきたかを、古代・中世史の概説を通して説明してゆく。

テキスト

特に指定しない、毎回プリントを配布する。

参考文献

授業中に適時示すが、以下の3冊は講義を理解する上で必要。

西嶋定生『中国古代の社会と経済』(東京大学出版会、1981年)

大沢正昭編『主張する<愚民>たち』(角川書店、1996年)

堀敏一『中国通史』(講談社学術文庫、講談社、2000年)

評価方法

出席点と筆記試験

受講者への要望

講義中に紹介する文献の内最低一冊は読み、勉強すること。遅刻は厳禁。

年間授業計画

1. オリエンテーション
2. 現代中国の姿 地理的概況・経済・社会
3. 戦後日本における「中国」認識をめぐって(1)
中国古代史研究を中心に
4. 戦後日本における「中国」認識をめぐって(2)
5. 中国古代社会の形成(1)
先史時代から殷周社会
6. 中国古代社会の形成(2)
春秋・戦国時代の変動
7. 秦漢統一帝国の出現と東アジア(1)
8. 秦漢統一帝国の出現と東アジア(2)

科目名	(旧)外国史概説 (後期)
担当者	熊谷哲也

講義の目標

イスラーム世界の歴史について学ぶ。イスラーム世界は我々の日常から最も遠い世界といえるかも知れないが、様々な報道に見られるように、国際問題の中心を占める世界でもある。そこに生きる人々の生活や文化に目を向けてみる。

講義概要

とくに現代的な問題関心から歴史を考えたい。パレスチナ問題や旧ユーゴの問題、カスピ海周辺諸国の民族問題におけるイスラームの状況を知ることによって、新聞やニュースをより正しく理解できるようにする。イスラームの教えにかんする基本的な知識もあわせて理解する。

テキスト

とくに定めない。何度かプリントを配布する。

参考文献

授業で指示する。

評価方法

出席点と筆記試験。

受講者への要望

初回の授業を欠席しないこと。

年間授業計画

1. オリエンテーション。イスラームの基本事項について説明する。
2. ユダヤ教・キリスト教とイスラーム教との関係について理解する。これら3者の関係は今日の国際情勢を理解するうえでも重要である。
3. 預言者によって建設された宗教共同体が、やがて広大なイスラーム世界として拡大する様相を概観する。
4. イスラーム世界における近代化の問題を、西洋とのさまざまな関係から考える。
5. パレスチナ問題 第2次中東戦争まで。
6. パレスチナ問題 第4次中東戦争とその後について。
7. 旧ユーゴスラビアの民族問題 ボスニア紛争までの歴史を中心に。
8. 旧ユーゴスラビアの民族問題 コソボ紛争とNATOの問題。
9. 旧ソ連のカスピ海沿岸、中央アジア諸国の問題 旧ソ連の崩壊まで。
10. 旧ソ連のカスピ海沿岸、中央アジア諸国の問題

現在の諸問題を中心に。

11. ポスト冷戦時代と、イスラーム諸国をめぐる様々な問題について。
12. まとめ 文明の衝突論とその是非をめぐって。

科目名	(新)外国史概説 (西洋史) (旧)外国史概説 (後期)
担当者	古川 堅治

講義の目標

歴史学と歴史教育の接点、そして両者の関係の仕方を、最新の研究成果を念頭におきながら概説的に把握しつつ、歴史の教え方についてどのように考えるべきかを外国史 - 本年度はヨーロッパ古代史 - を中心に理解することを目標とする。

講義概要

講義はビデオやLDなど映像資料を使いながら概説的に説明するが、積極的な議論が湧きあがることも期待したい。授業では、アット・ホームな雰囲気の中にも、何よりも歴史の面白さと厳しさを伝えていきたいと考えている。

テキスト

特に使用するということはしない。資・史料をプリントとして配布。

参考文献

最初の授業で「参考文献一覧表」を配布するので、適宜、図書館等で参考にすること。

評価方法

基本的にはレポート提出により評価するが、出席や議論への参加度合いも参考にする。

受講者への要望

教員を志望して授業に臨むはずであるから、個々が主体的・積極的に授業を作り上げるという姿勢で参加して欲しい。

年間授業計画

1. はじめに
 - 1) 歴史を学ぶことの意味
 - 2) 考察対象と時空的限定
2. クレタ、ミケーネ文明と英雄の時代
 - 1) クレタ文明とミケーネ文明
 - 2) 「海の民」と東地中海世界の崩壊：「トロイア戦争」の歴史性
3. 「暗黒時代」からボリス世界へ
 - 1) ボリス世界への胎動
 - 2) 植民活動
 - 3) アテナイの興隆
4. ペルシア戦争
 - 1) ペルシアとギリシア
 - 2) ギリシア古典文化
5. ボリス社会の盛衰
 - 1) ペリクレスとアテナイ帝国

- 2) ペロポネソス戦争
- 3) 前四世紀のギリシア世界
6. アレクサンドロスとヘレニズム時代
 - 1) アレクサンドロスの東征
 - 2) 後継者戦争とヘレニズム諸王国
 - 3) 「ヘレニズム」の歴史的意義
7. ローマの発展
 - 1) ローマの起源
 - 2) イタリア統一から地中海制覇まで
8. ローマの市民社会 (その1)
 - 1) 市民と政治
 - 2) 公職者と元老院
9. ローマの市民社会 (その2)
 - 1) 家父長権と家
 - 2) 奴隷たち
10. ローマ帝国の構造
 - 1) プリンキパトゥス制からドミナトゥス制へ
 - 2) 属州支配
11. 古代社会の終焉と新しい時代の胎動
 - 1) ローマ帝国の滅亡
 - 2) キリスト教化されたヨーロッパ
12. 「まとめ」に代えて

科目名	(旧)外国史概説 (後期)
担当者	久慈栄志

講義の目標

ヨーロッパ諸国の「近代化」過程を政治・経済・宗教等の側面から考察する。

「近代化」の特質とその功罪を検証し、明治以降の日本にいかなる影響を与えてきたか、という点もあわせて論じたい。

講義概要

16世紀頃から19世紀までの歴史的事象の中から、ヨーロッパ圏内はもとより、周辺世界に対してもインパクトが大であった事項をピックアップして取り上げる。

前半は宗教的側面から、後半は経済的側面を中心にアプローチしたい。

また、受講者が社会科(地歴・公民)教員を志望する学生であることを考慮し、時事問題を適宜とりあげ、問題意識の啓発・構築に供したいと考えている。

テキスト

特に指定しないが、下に掲げた参考文献中、2冊程度は目を通してほしい。

参考文献

- ・西嶋定生、木村尚三郎他編「世界歴史の基礎知識」有斐閣
- ・大下尚一他編「西洋の歴史(近現代編)」ミネルヴァ書房
- ・尚樹啓太郎編「西洋史30講」東海大学出版会
- ・ジャック・ル・ゴフ「ヨーロッパと中世・近代世界の歴史」多賀出版
- ・阿部謹也「ヨーロッパを見る視角」(岩波セミナーブックス58)岩波書店

評価方法

最終回の授業時に試験を実施。(論述形式、ノート等持込不可)

受講者への要望

高校世界史レベルの基礎知識はマスターしておくこと。同時代人的視点で歴史事象を捉える姿勢で臨んでもらいたい。

年間授業計画

1. オリエンテーション

本講義の目的。歴史学の役割と学ぶ姿勢。

2. 歴史学へのアプローチ

文献の検索、史料収集、論文作成等について。

3. 歴史叙述・歴史理論の変遷(1)

古代から中世までについて解説する。

4. 歴史叙述・歴史理論の変遷(1)

近代以降について解説する。

5. 「近代」の概念について

ヨーロッパ中心史観に起因する「近代」の概念について考察する。

6. 「近代」の幕あけ(1)

宗教改革に見る近代性と、インパクトについて考える。

7. 「近代」の幕あけ(2)

いわゆる「地理上の発見」がもたらした価値観の転換と、いわゆるヨーロッパ優位を前提とした世界分割について説明する。

8. ヨーロッパ市民革命

イギリス・フランスの両革命における共通点と異質なるものをとりあげ、国民性の違いを比較する。

9. 産業革命

イギリスを例にとり、その「魔力」と、社会的諸矛盾をあぶり出し、社会主義運動の必然性にも言及したい。

10. 同上

11. 「近代」総括

ヨーロッパ諸国の近代化過程を振り返り、その業績を正・負両面から分析し、「近代」のまとめとしたい。

12. 予備

科目名	(新)地理学概説 (自然) (前期) (旧)地理学概説 (通年) (前期)
担当者	秋本弘章

講義の目標

自然環境と人間の関わりについて、地理学的観点から具体的な事例をもとに考察する。あわせて、中等教育諸学校で、地理の授業を行う際に必要とされる基本的な自然環境の見方を身につける。

講義概要

身近な地域の環境を自然地理学の観点から分析する。基礎として、地形図の利用法を扱った後に、関東地方の自然地理的な特色とその基盤の上に立った人々の生活について説明する。

テキスト

特に指定はしない。講義中の資料等を配布する。

参考文献

貝塚爽平「東京の自然史」紀伊国屋書店
 杉谷・平井・松本「風景のなかの自然地理」古今書院
 中村・小池・武内編「日本の自然地域編 3 関東」岩波書店
 ほか、講義中に示される。

評価方法

試験とレポート(小課題) 出席状況

受講者への要望

講義科目ではあるが実習等を行う予定である。色鉛筆、定規等指定された用具を準備すること。

年間授業計画

1. オリエンテーション(講義の概要)
2. 地形図利用の基礎(1) 地形図の基礎知識
3. 地形図利用の基礎(2) 距離と面積、等高線と地形
4. 地形図利用の基礎(3) 土地利用を読む
5. 東京・関東の地形的特色(1) 山の手と下町
6. 東京・関東の地形的特色(2) 武蔵野台地
7. 東京・関東の地形的特色(3) 荒川と利根川の低地
8. 東京・関東の地形的特色(4) 東京湾
9. 東京・関東の地形的特色(5) 関東山地
10. 東京・関東の気候的特色(1) 気候システムと気候のスケール
11. 東京・関東の気候的特色(2) 観測データと景観から気候を読む
12. 東京・関東の気候的特色(3) 都市気候

科目名	(新)地理学概説 (人文) (旧)地理学概説(通年) (後期)
担当者	秋本弘章

講義の目標

地理学の基本的概念を理解し、これらの概念を用いて、どのような研究が行われてきたかを展望する。あわせて、中等教育諸学校で、地理の授業を行う際に必要とされる基本的な人文地理学の見方・考え方を身につける。

講義概要

地理的知識の拡大と地理学の歴史を述べた後、地理学の主要概念のうち、「環境」「立地」「伝播」「景観」について概説する。さらに、人文地理学のいくつかのテーマを取り上げ、理解の深化を図る。

テキスト

特に指定はしない。講義中の資料等を配布する。

参考文献

中村・高橋ら編 地理学講座 全6巻 古今書院
高橋・田林・小野寺・中川「文化地理学入門」東洋書林

ほか、講義中に示される。

評価方法

試験とレポート(小課題)、出席状況

受講者への要望

地理学概説 とあわせて受講することが望ましい。
積極的な態度での学習を望む。

年間授業計画

1. 講義の概要、地理学の歴史(1)
2. 地理学の歴史(2)
3. 地理学の主要概念(1)環境
4. 地理学の主要概念(2)立地
5. 地理学の主要概念(3)伝播
6. 地理学の主要概念(4)景観
7. 地理学のトピック(1)現代の地図
8. 地理学のトピック(2)スポーツと地理学
9. 地理学のトピック(3)観光と地理学
10. 地理学のトピック(4)時間地理学
11. 地理学のトピック(5)メンタルマップ
12. 地理学のトピック(6)教育と地理学

科目名	(新)地誌学概説 (日本) (旧)地誌学概説 (前期)
担当者	秋本弘章

講義の目標

特定の地域を対象とする地誌学は、地理学のなかで重要な位置を占めている。地誌学における主要概念である「地域」と地域分析法を理解した上で、日本を事例地域として地誌学的見方を身につける。

講義概要

まず、地理学における地誌学の位置、ならびに「地域」概念について講義した後、地域を扱う上で必要な文献や統計の収集法や利用法、統計分析など地域分析の手法を習得する。その上で、日本を事例として、自然環境、歴史的背景、地域文化、産業構造等を考察する。

テキスト

特に指定はしない。講義中の資料等を配布する。

参考文献

中村・高橋ら編 地理学講座 全6巻 古今書院
ほか、授業中に示される。

評価方法

試験とレポート(小課題)、出席状況

受講者への要望

地図帳を持参すること。講義科目であるが実習を含むので、色鉛筆、電卓等授業中に指示された用具は各自用意すること。

年間授業計画

1. オリエンテーション、系統地理学と地誌学
2. 「地域」概念について
3. 地域分析の基礎(1) 文献・資料・統計の所在と検索
4. 地域分析の基礎(2) 統計の理解と利用
5. 地域分析の基礎(3) 統計の地図表現
6. 地域分析の基礎(4) 地理情報システム
7. 地域分析の基礎(5) 地域構造図
8. 日本地誌(1) 自然環境
9. 日本地誌(2) 風土と地域文化
10. 日本地誌(3) 人口分布と人口構造
11. 日本地誌(4) 産業と地域変容(1)
12. 日本地誌(5) 産業と地域変容(2)

科目名	(新)地誌学概説 (世界) (旧)地誌学概説 (後期)
担当者	秋本弘章

講義の目標

特定の地域を対象とする地誌学は、地理学の中で重要な位置を占めている。後期は、世界の地域構造を概観したのち、ヨーロッパを事例地域としてとりあげ、地誌学的見方を身につける。

講義概要

世界の地域構造とその変容を概観した後、ヨーロッパの自然・文化・産業経済等について検討する。

テキスト

とくに指定はしない。講義中に資料を配布する。

参考文献

T. G. ジョーダン著 山本・石井訳「ヨーロッパ文化」大明堂

評価方法

試験とレポート(小課題)、出席状況

受講者への要望

地図帳を持参すること。地誌学概説 とあわせて履修することが望ましい。積極的な態度での学習を望む。

年間授業計画

1. 地域の見方と世界の地域構造
2. 世界の地域構造とその変容
3. ヨーロッパ地誌(1) 範囲と自然環境
4. ヨーロッパ地誌(2) 人種・人口問題
5. ヨーロッパ地誌(3) 文化 宗教
6. ヨーロッパ地誌(4) 文化 言語
7. ヨーロッパ地誌(5) 民族と国家
8. ヨーロッパ地誌(6) EUの成立と発展
9. ヨーロッパ地誌(7) 農業地域と共通農業政策
10. ヨーロッパ地誌(8) 鉱工業とその変容
11. ヨーロッパ地誌(9) 都市の特質
12. ヨーロッパ地誌(10) ヨーロッパの地域構造

科目名	(旧)地理学調査法(前期)
担当者	松本栄次

講義の目標

調査地域に赴いて資料を収集するフィールドワークが地理学の調査研究のもっとも基本的な作業であり、地理教育においても地域の調査は重要視されている。この講義では、とくに地域の理解に欠かせない自然環境と土地利用に関するフィールドワークについて、その準備・実行・資料整理の方法などを解説する。

講義概要

具体的地域(とくに大学周辺地域)を題材にして、自然環境と土地利用の調査に必要な基礎的テクニックについて講義および実習を行う。また、自然環境と人間に関する具体的な地理学調査研究の例を紹介する。

テキスト

使用しない。

参考文献

授業中に適宜紹介する。

その他：地形図1～2枚(授業中に指定する)

評価方法

学期末のレポートと出席状況を総合して判断する。

受講者への要望

実習に使用する鉛筆・色鉛筆(3色程度)・定規を用意すること。

年間授業計画

1. 序説：地理学および地理学研究の方法
2. 地図の利用 1：地図の種類と特徴、地図の用途・入手法
3. 地図の利用 2：位置・距離・面積など基本情報の獲得
4. 地図の利用 3：地形判読の実習
5. 地図の利用 4：土地利用判読の実習
6. 空中写真の利用 1：空中写真から得られる基本情報
7. 空中写真の利用 2：空中写真判読の実習
8. 測量の原理と簡易測量法
9. 平野地域における土地条件と土地利用の野外調査
10. 山地・丘陵地域における土砂災害の調査法
11. 地生態系とその各要素の調査法
12. まとめ

科目名	(新)法律学概説 (経済学部「法学」と合併)
担当者	古 関 彰 一

講義の目標

日本の法制度の基本的構造を理解してもらうと同時に、法律学が対立する利害を論理的に調整し、解決することをひとつの目標としていることから、論理的に考える能力を養えるようにしたい。結論(結果)よりも論理展開の過程を、暗記ではなく思考力を養えるよう努めたい。

講義概要

経済学部の「法学」であることを念頭において、「法学」を理解する上で基本となる、法の形式、裁判制度と判例などを解説した後、人権と統治原理、平和主義、国内法と国際法、国際化時代と法など多岐にわたる問題を講ずる。

テキスト

西村健一郎・西井正弘・初宿正典編著『判例法学』第3版(有斐閣、2000年)

参考文献

講義の中で指示する。

評価方法

[前期] 前期試験期間中に、前期に講義した範囲のなかから、3問出題し、2問につき論述したもの(持ち込み一切不可)を評価対象とする。

[後期] 後期試験期間中に、後期に講義した範囲のなかから、3問出題し、2問につき論述したもの(持ち込み一切不可)を評価対象とする。

前期授業計画

1. 開講の辞：近代国家と法：公法と私法
「事件」「紛争」を様々な視点から見ると。交通事故を刑事・民事・行政から見ると。
2. 法の形式：法源、不文法、成文法(法律、命令、規則、条約、条例など)
実定法(実体法と手続法)「六法」とは、学説(通説、少数説)の意義
3. 裁判制度：裁判の意義、裁判制度、法曹三者(判・検・弁)
4. 判例：判例の意義、判例・裁判例の調べ方
5. 人権の主体：憲法の「国籍要件」規定、マクレーン事件、外国人の選挙権・公務就任権事件
6. 人権と私法関係：公法と私法(私人関係)の関係、三菱樹脂事件
7. 法の下での平等：法的性格、性差別(定年年齢)日産自動車事件

8. 法の下での平等：衆議院議員定数事件(参議院、地方議会議員定数事件)
 9. 信教の自由：オウム真理教解散命令事件、津地鎮祭訴訟、愛媛玉串事件
 10. 表現の自由と検閲：博多駅フィルム提出命令事件、税関検査事件
 11. 職業選択の自由と営業の自由の制限：薬事法事件、公衆浴場事件
 12. 前期のまとめ、論述試験の論じ方
- #### 後期授業計画
13. 財産権の保障とその制限：森林法の共有林分割請求事件
 14. 生存権：生存権の意義、朝日訴訟、堀木訴訟
 15. 教育を受ける権利と教育の自由：教育権の所在、旭川学力テスト事件
 16. 刑事人権概説：憲法・刑事訴訟法上の被疑者、被告人の刑事手続規定
 17. 死刑と残虐な刑罰：死刑制度、死刑合憲判決
 18. 日本国憲法の統治原理：議会制民主主義、議院内閣制、職業裁判官制度
 19. 平和主義と人権：平和的生存権、国防義務、軍法会議、国家緊急権
 20. 自衛隊と軍備不保持：憲法9条の政府解釈、長沼ナイキ基地事件判決
 21. 国の安全保障と日米安保条約：安全保障の概念、日米安保条約と人権、砂川基地事件判決
 22. 国家主権と国際組織：国際法上の国家、人権の国際化、塩見事件判決、ベルナドッテ伯事件勧告的意見
 23. 国際化と法：難民条約への加入と国内法の改正
 24. 閉講の辞：「国家」と「国民権」の近・現代の法は今後どう変化するのか

科目名	(新)政治学概説 (経済学部「政治学総論」と合併)
担当者	杉田孝夫

講義の目標

現代社会の政治構造と政治を理解するうえで必要な基本的な概念といくつかの観点を学び、現代の政治的諸問題を批判的に理解する教養を養うことを年間の目標とする。

前期は政治学の定番メニュー「国民国家の政治システム」を構成する諸概念を理解する。後期は現代政治を動かしている新しい政治的要因を考える。

講義概要

講義は毎回の主題に関するレジュメを配付し、それに即して講義する。

講義内容は政治学の基礎を一通り理解できるような構成である。

テキスト

とくに指定しない

参考文献

マックス・ウェーバー『職業としての政治』岩波文庫

斉藤・有賀・阿部『政治』UP選書、東京大学出版会
ハンチントン『文明の衝突』集英社

評価方法

評価資格は出席率70%以上とする。

前期・後期それぞれの学期末試験の結果に基づき評価をおこなう。

受講者への要望

受講者が政治を自分たちの生活の問題として考え、その問題を考えるうえで必要な認識の方法と概念装置を身に付けるのに役立つ講義をする。

まずは出席し、講義の内容を理解する努力を払うことを望む。

前期授業計画

1. はじめに：政治とはなにか
2. 近代国家の構成原理 (1) 国家
3. (2) 主権
4. (3) 国民：国民国家
5. 議会制度
6. 議会主義と国民主権
7. 意志決定のメカニズム：多数決原理と代表制
8. 政治指導と政治責任
9. 政党と政党制度
10. 大衆社会と民主主義
11. 官僚制と行政システム

12. 近代日本における近代化と官僚制

後期授業計画

1. 近代の政治価値 (1) 個人・権利・平等
2. (2) 民主主義のパラドクス
3. (3) 自由と自由主義
4. (4) 公と私：あるいは共同性
5. 政治とジェンダー (1) 政治におけるジェンダー
6. (2) 戦後ドイツの政治的経験
7. (3) 戦後日本における政治的経験
8. (4) 政治における男女平等の範囲と課題
9. 国際政治の歴史と現在 (1) 主権国家システムの歴史
10. (2) 国際機構と主権国家の構図
11. (3) EUとヨーロッパ
12. (4) 文明の衝突を回避するために：民族・言語・宗教

科目名	(新)社会学概説 (旧)社会学概論
担当者	有吉広介

講義の目標

中学・高校の社会科教育のなかで取りあげられている社会学的知識・説明・解釈を中心として、現代の社会生活を理解するために必要な考え方を講義する。

講義概要

まず、社会的存在としての人間の諸相を考えるための基本的な概念を取りあげ、そのなかで、人間、社会および文化の相互関係を考察する。ついで、社会生活の基本単位といわれる家族集団が、近代化のさまざまな過程のなかでどのように変化してきたかを問題にする。特に核家族化の問題点を考察する。引き続き、近代から現代にわたって展開してきた社会の産業化、都市化、大衆化、官僚制化、学歴社会化、情報化、および福祉化の諸現象について逐次ふれながら、現代の社会問題の基礎を明らかにする。最後に、今日解決をせまられている高齢社会の諸問題の背景に、現代社会のさまざまな構造的特質があることを指摘する。

テキスト

講義に必要な資料はプリントして配布する。

参考文献

適時紹介

評価方法

前期および後期の終わりに課題を示してレポートを提出してもらい、これを評価する。

年間授業計画

1. 社会行動の構造
2. 社会集団の構造と機能
3. 人間、社会、文化の相互関係
4. 家族の構造と機能
5. 家族制度・核家族化
6. 社会の産業化
7. 職業社会・雇用社会
8. 官僚制化
9. 大衆社会
10. 社会の階層化
11. 日本人の「中」意識の背景
12. 前期講義の補足
13. 都市化
14. 都市問題
15. 新しいコミュニティ

16. 学歴社会の性格
17. 日本の近代化と学歴尊重
18. 社会の情報化
19. 社会の福祉 生活の質の重視
20. 日本人の生活時間の使い方
21. 社会の高齢化
22. 高齢社会に対する日本人の意識
23. 高齢社会への対応
24. 後期講義の補足

科目名	(新) 哲学概説 (旧) 哲学概説
担当者	河 口 伸

講義の目標

昨今、哲学の復権が唱えられ、自分探しの一環として哲学が一種の流行となっているが、それらをも包摂し相対化する視点こそが、今求められている。一般教養としての哲学史的知識も教職に必要であるが、教師として以前に、一人の人間として真摯に生きるために「哲学」が持つ意義を考えてもらいたい。

講義概要

西欧思想を歴史的に辿ることが、本講義の概要であるが、そこには二つの偏りが存在していることを意識しつつ論じて行きたい。西欧哲学としての偏りと明治以降の輸入哲学としての偏りとである。哲学を、ギリシア起源の「学」としてのみ捉えるのではなく、幅広く「思想」として捉え、政治・社会・宗教・歴史・科学等への影響をも視野に入れて論じたい。

個々の思想家の経歴や思想の細部の紹介は、テキストに譲り、彼らがその思想を形成した動機や課題、歴史的位置付けなどを重視して論じる。

テキスト

「精神史としての哲学史」 角田幸彦編 東信堂

参考文献

講義の際に随時指示する。

評価方法

履修者の数によって変更はあり得るが、基本的には次の通り。前後期の定期試験、夏冬各1回のレポート提出、出席点を総合的に評価する(試験の点数にそれぞれ加算する)。出席が2/3以上に達しない者は単位を修得できない。出欠は毎回とる。

受講者への要望

講義に唯出席しているだけでなく、またノートをとるだけでなく、自ら考えることを要望したい。

年間授業計画

1. 哲学とは何か(1)
2. ソクラテス以前
3. ソクラテス
4. プラトン
5. アリストテレス
6. スコラ哲学
7. ルネサンスと宗教改革
8. 科学革命
9. 社会契約説

10. 啓蒙主義
11. 合理論と経験論(1)
12. 合理論と経験論(2)
13. カント
14. ドイツ観念論
15. キルケゴール
16. ニーチェ
17. マルクス
18. フッサール・ハイデッガー・ヤスパーズ(1)
19. フッサール・ハイデッガー・ヤスパーズ(2)
20. 歴史主義・解釈学
21. ウィトゲンシュタイン
22. 構造主義
23. 言語哲学
24. 哲学とは何か(2)

科目名	(新)倫理学概説 (旧)倫理学概論
担当者	中 島 文 夫

講義の目標

高等学校で「倫理」を教えるためには、先ず自らが倫理について考える姿勢を身につけ、かつ円満な人格を実現していることが望ましい。これは、中学校において「道徳教育」を実践するための精神的基盤としても不可欠である。併せて、そのために必要な基礎的教養を身につけさせることを意図する。

講義概要

1. 倫理学とはどういう学問であるか。学問の全体系の中でどういう位置を占めるか。
2. 主要概念 この中で、思想上重要な思想家の学説にも触れることになる。
3. 「交わりにおける自我」を如何に実現するかについての考察。

テキスト

使用しない。ただし、レジュメのプリントを配布する。

参考文献

必要に応じて指示する。

評価方法

前・後期共、筆記試験を行う予定。出欠は毎回点検し、評価の一要素とする。甚しく欠席の多い者には単位を与えない。

受講者への要望

欠席・遅刻を当然の権利と考えることなく、欠席はもとより遅刻もしないように心がけ、授業中の私語を慎むなど、礼儀正しい態度を望む。

年間授業計画

1. 序章 倫理学とは何か
2. 第1章 個別と普遍
 - §1. 人間存在の個別的原理と普遍的原理
3. §2. 主体としての人格
4. §2. 主体としての人格(続)
5. §3. 共同体
6. §3. 共同体(続)
7. 第2章 主要概念の考察
 - §1. 規範
8. §1. 規範(続)
9. §1. 規範(続)
10. §2. 価値
11. §2. 価値(続)
12. §2. 価値(続)

13. §3. 道徳意識
14. §3. 道徳意識(続)
 - §4. 徳と義務
15. §5. 行為
16. §6. 自由
17. §6. 自由(続)
18. §7. 愛
19. 第3章 「交わりにおける自我」の実現 「交流分析」の活用
 - §1. 交流分析の基本
 - §2. 構造分析
 - §3. 交流パターン分析
 - §4. 交流の動機
 - §5. ゲーム分析
 - §6. 脚本分析

科目名	(新)宗教学概説 (旧)宗教学概論
担当者	河 口 伸

講義の目標

戦後教育が宗教について意識的に或いは無意識的に避け続けて来た為、現代の日本人は宗教に関して一種の「真空状態」に置かれており、そこから様々な問題が昨今生じて来ている。そこで本講義は、宗教学の学的体系性よりも、むしろ諸宗教の歴史と現在についての一般的概括的知識を得られるようにすることを重点とする。更に教職科目であることにも鑑み、宗教教育のあり方についても論じたい。

講義概要

前期は、洋の東西、今昔を問わず世界史上の諸宗教の歴史と現在について説明し、宗教の果たして来た役割・問題点について考えてもらう。後期は、日本の宗教の歴史と、日本人の宗教的心性の形成にまず触れ、その後に宗教的諸概念についての理解を深め、日本や欧米の先進諸国において宗教集団が現在持っている意義や問題点を論じた上で、宗教教育の是非・可能性を論じる。

テキスト

「世界がわかる宗教社会学入門」橋爪大三郎著 筑摩書房

参考文献

講義の際に随時指示する。

評価方法

履修者の数によって変更はあり得るが、基本的には次の通り。前後期の定期試験、夏冬各1回のレポート提出、出席点を総合的に評価する(試験の点数にそれぞれ加算する)。出席が2/3以上に達しない者は単位を修得できない。出欠は毎回とる。

受講者への要望

講義に唯出席しているだけでなく、またノートをとるだけでなく、自ら考えることを要望したい。

年間授業計画

1. 講義概要の説明及び宗教とは何か(1)
2. 神話と宗教
3. ユダヤ教
4. キリスト教(1)
5. キリスト教(2)
6. キリスト教(3)
7. イスラム教(1)
8. イスラム教(2)
9. 仏教(1)

10. 仏教(2)
11. ヒンドゥ教
12. 儒教
13. 道教
14. 日本の宗教の歴史と現在(1)
15. 日本の宗教の歴史と現在(2)
16. 日本の宗教の歴史と現在(3)
17. 宗教上の諸概念(儀礼、戒律、修行など)(1)
18. 宗教上の諸概念(儀礼、戒律、修行など)(2)
19. 宗教集団の諸問題(1)
20. 宗教集団の諸問題(2)
21. 学校教育と宗教(1)
22. 学校教育と宗教(2)
23. 宗教とは何か(2)
24. 宗教学の課題

科目名	(新)心理学概説 (旧)心理学概論
担当者	林 潔

講義の目標

心理学は行動の科学ともいわれています。

人がなぜそのような行動をするのかということについて考え、その結果を現実役に立てていこうというのが心理学の役割です。

この時間では、心理学の基本的な考え方について紹介をします。

また、教職系の科目でもあるため、教職に関連する内容を中心としました。

講義概要

まず教育の分野における心理学の役割についてとりあげます。

心理学の基本的な考え方を押さえて各論に進みます。

各論として性格心理学、中高生とその問題への取り組み、集団理解、心理教育を内容とします。受講生の専攻との関わりとして、今日の産業・組織心理学野活動を紹介します。

参考文献

随時提示します。

評価方法

期末試験を主にします。レポートと平常点を考慮することがあります。また教職科目なので、授業出席も単位取得の条件です。レポートや質問は下記のE-mail を利用されてもよいです。

受講者への要望

積極的に質問をして下さい。質問などあとから思いついたら E-mail (hayashi@shiraume.ac.jp) を使って下さい。交流のある授業にしたいです。

年間授業計画

1. 教育における心理学の役割

さまざまな教育活動に、心理学の知識がどのようにかかわっているのか、いくつかの例について紹介します。

2. 心理学の基本的考え方について (1)

- - 行動主義の心理学 - -

心理学の行動理解といっても立場によって異なります。まず最初、経験を重視する行動主義の考え方について紹介します。

3. 同 (2)

- - ものの見方を重視する - -

次のテーマは認知論です。その人がどのようなも

のの見方をしているのかを重視します。

意識的な行動はこのことに関係しています。

4 - 6 . 同 (3) - (5)

- - 無意識の動きを重視する - -

第三に精神分析の考え方をとりあげます。自分の気がついていない内面の世界が、行動に深く関係しているのだという人間理解です。

この部分は、Freud の深層心理学の概説になります。

内容は次のとおりです。

自我の構造。発達(成長)について。自我の防衛。

7 - 9 . 性格について

性格をどのように考えるか。性格心理学の概説です。

これは性格をパターン化して考えるもの、性格特性を分析するものに分かれます。

内向性/外向性、タイプ A など、今日の一般的な性格論を紹介します。

10 . 性格テスト・心理テストの役割と限界

教育活動に関連した、心理テストを取り上げます。そしてその効用と限界について考えます。

11 . 発達過程としての青年期

中高生の心理的特徴について考えます。

12 - 14 . 集団の心理

集団の心理的特徴について、集団力学の視点からとりあげます。

集団とリーダーの役割。リーダーシップと PM 理論、集団討議方式など。

15 - 16 . 進路指導の方法

進路指導の方法と基本的な課題についてとりあげます。

17 - 20 . 中高生の問題と対応

今日の中高生の当面している一般の問題と、対応の例について紹介します。

21 - 22 . 心理教育について

友人ができない。対人関係が持ちにくいなど、日常的な問題についてためらいが見られる中高生が結構います。このような問題に対する、訓練としての対応について心理教育 (Psychoeducation) といいいます。その基本的な方法を紹介します。

23 - 24 . 産業・組織心理学の役割

産業活動にかかわる心理学の活動が、産業・組織心理学です。

採用・選抜から広告までその内容は多岐にわたりますが、その一端を紹介します。

科目名	図書館概論（前期）
担当者	井上靖代

講義の目標

IT 革命といわれる情報社会のなかでの図書館の現在位置、将来展望を歴史的記憶をたどりながら、確認し、考えていく。

講義概要

公立図書館を中心として課題の検討をおこないながら、図書館とは何かについて全体を把握していく。

テキスト

塩見昇編著『図書館学概論』三訂版 日本図書館協会 2001年

参考文献

適宜提示

評価方法

出席 レポート 期末試験

受講者への要望

講義中心になりますが、テキスト以外に参考文献や雑誌論文記事を読んでもらうつもりでいます。少なくとも授業計画で指示した部分のテキストはあらかじめ読んでおいてください。図書館関連の専門用語は必ず理解して、自分の言葉で説明できるようになってください。

年間授業計画

1. オリエンテーション 現代社会と図書館(1) “図書館”とはなにか
2. 図書館法規と行政
3. 現代社会と図書館(2) 生涯学習社会・情報社会と図書館
4. 図書館の歴史的展開
5. 図書館の理念(1) 図書館と知的自由
6. 図書館の理念(2) 図書館員の専門性
7. 図書館の実務
8. 地域社会と公共図書館
9. 地域社会と学校図書館
10. 地域社会と大学図書館
11. 国立国会図書館、専門図書館など
12. 図書館ネットワーク まとめ

科目名	図書館サービス経営論
担当者	井上靖代

23. 図書館をめぐる課題(2)

24. まとめ

講義の目標

公立図書館を中心として、その図書館活動の実務を理解し、情報資料・人的資源の効率よい図書館経営とは何か、またその活動評価についても考えていく。

講義概要

前半部分は図書館サービスの実務を学習する。後半はケース・スタディとして図書館での多様な課題をとりあげて、討論をしながらすすめていきたい。

テキスト

なし

参考文献

適時指示

評価方法

出席 レポート 試験

受講者への要望

できるだけ多くの図書館を見学するなり、働くなりして体験してほしい。

年間授業計画

1. オリエンテーション
2. 図書館サービスの意義 近代市民社会と公共図書館の発達
3. 図書館の4要素
4. 施設・設備と図書館利用
5. 資料情報提供(1)
6. 資料情報提供(2) 地域情報、情報公開など
7. 集会・文化活動、行事など
8. 利用対象者別サービス
9. 利用者の交流の場としての図書館
10. 図書館マーケティング活動
11. 図書館サービスと図書館員・司書 専門職
12. 図書館サービスのまとめ
13. 公共図書館の使命と任務
14. 図書館と知的自由(1)
15. 図書館と知的自由(2)
16. 資料管理
17. 人事管理
18. 施設管理
19. 図書館政策と財政
20. 図書館と地域社会
21. 図書館活動の評価
22. 図書館をめぐる課題(1)

科目名	情報サービス論
担当者	福田 求

講義の目標

本講義での情報サービスとは、図書館の情報提供機能を具体化するサービス全般のことをいうが、これにはレファレンスサービスやカレントアウェアネスサービス、さらには CD-ROM やオンラインの検索サービス等、さまざまなサービスが含まれる。本講義ではこの情報サービスの総合的な理解を目指し、情報サービスに関する解説と演習を行う。

講義概要

前期では、図書館の情報サービスについての基本的な事項を解説する。また後期においては主に、情報サービス（特にレファレンスサービス）の実践的能力を養成するために、参考図書等さまざまな情報源を用いた検索および回答の実習を行う。

テキスト

指定しない。

参考文献

適宜紹介する。

評価方法

前期および後期の期末試験。これに平常点（実習への参加態度等）を加味する。

受講者への要望

本講義では教室の構造上定員を設けており受講者の抽選を行う。抽選作業については時間割表を参照し、不明な点があれば教務課経済学部窓口で確認すること。今年度からは「授業中の抽選」は行わないので注意すること。

年間授業計画

1. オリエンテーション。年間予定、授業方法等について説明
2. 情報サービスの概要
3. 情報サービスの実際（ビデオ鑑賞等）
4. レファレンスサービス
5. 利用案内、レフェラルサービス
6. カレントアウェアネスサービス
7. 検索サービス
8. 発展的情報サービス
9. 情報サービスで用いる情報源の類別（1）
10. レファレンスコレクションの構築・評価
11. 情報サービスにおけるコミュニケーション
12. まとめ
13. 後期実習についての説明

14. 情報サービスで用いる情報源の類別（2）
15. 辞書
16. 事典
17. 便覧／図鑑
18. 歴史／地理・地名の情報源
19. 人物・団体の情報源
20. 統計の情報源
21. 文献検索の情報源
22. 情報サービス担当者の資質・能力
23. 最新の情報サービス
24. まとめ

科目名	情報検索演習（前期）
担当者	高柳敏子

講義の目標

情報検索システムの一連の流れの中で、蓄積段階として、情報の入手、主題分析、検索キーの作成、索引、データベース等を理解し、続いて検索段階として、情報要求、検索質問、検索式、シソーラスの利用、索引との照合、検索結果、検索の評価等を理解する。

検索式を作成する、シソーラスを利用する、索引との照合をする、検索結果を得るといった過程では、オンラインや CD-ROM 等によるデータベース検索の実習をできるだけ多く体験し、実践的な能力を養うことを目指す。

講義概要

情報検索システムの蓄積段階および検索段階を概観する。蓄積段階では、一次資料から二次資料への情報の加工の過程で、情報の入手、主題分析、検索キーの作成、索引、データベースといった処理項目を、検索段階では、情報要求、検索質問、検索式、シソーラスの利用、索引との照合、検索結果、検索の評価といった処理項目を順を追って解説する。検索式の解説では演算子を使用した検索条件の表現方法を、またシソーラスについては、その目的とシソーラスの構成を、検索の評価では再現率と適合率について学ぶ。

実践的な情報検索能力を養うために、オンライン検索では、インターネット上の各種情報検索システムをできるだけ活用し、CD-ROM を使用したオンライン検索では、練習用 J-BISC による実習および最近のマルチメディア事典等も扱ってみる。

テキスト

渡辺満彦、北克一、澤井清、原田智子共著 「情報検索演習」新・図書館学シリーズ6、樹村房、1998 .

参考文献

細野公男編「情報検索」講座図書館の理論と実際 5、雄山閣、1991 .

評価方法

3 回程度のレポートの提出、および出席を加味して評価する。

受講者への要望

MS-Windows、MS-Word、および MS-Excel の取り扱いに慣れていること。また、受講者数を制限しているため、時間割表を確認すること。

年間授業計画

1. ガイダンス

情報、情報検索とは

2. 情報検索システム

情報検索システムの蓄積段階と検索段階

3. 検索演習(1)

OPAC とインターネット

4. 蓄積段階の諸項目

一次資料と二次資料、情報の入手、主題分析、検索キー、索引

5. 情報検索とデータベース

データベースとは

6. 検索演習(2)

オフライン検索、CD-ROM の利用

7. 検索段階の諸項目(1)

情報要求、検索質問、検索式

8. 検索演習(3)

教材用 J - BISC の実習

9. 検索段階の諸項目(2)

検索結果の評価、再現率、適合率

10. 検索演習(4)

シソーラス等検索用辞書の利用、JOIS 体験

11. オンライン検索とインターネット

インターネットとサーチエンジン、電子図書館

12. 検索演習(5)

総合的な検索演習およびまとめ

科目名	情報検索演習（前期）
担当者	福田 求

講義の目標

必要な情報を効果的に選択・入手する行為としての情報検索について理解を深める。特に、コンピュータ技術に基づく情報検索システムの知識を、解説および実習を通して体得する。

講義概要

本講義ではまず、情報検索に関する基礎的な概念について解説する。そしてその知識を踏まえた上で、実際の情報検索技術に慣れ、習熟するために、WWWの検索エンジンや CD-ROM データベース、商用オンラインデータベースを用いた情報検索の実習を行う。実習では可能なかぎり、受講者が今後の調査 / 研究活動で利用できるような情報源を紹介する。

テキスト

使用しない。

参考文献

適宜指示する。

評価方法

定期試験。これに平常点（実習への参加態度等）を加味する。

受講者への要望

本講義では教室の構造上定員を設けており受講者の抽選を行う。抽選作業については時間割表を参照し、不明な点があれば教務課経済学部窓口で確認すること。今年度からは「授業中の抽選」は行わないので注意すること。

前期授業計画

1. オリエンテーション
2. 情報検索の概要
3. データベース
4. 索引語、シソーラス
5. 情報検索関連作業のプロセス
6. 検索式
7. 検索結果の評価
8. WWW の検索エンジン（1）
9. WWW の検索エンジン（2）
10. CD-ROM 検索
11. 商用オンラインデータベースの検索
12. 授業のまとめ

科目名	図書館資料論（前期）
担当者	松 林 麻実子

- 10．出版流通制度（2）
- 11．インターネット上の情報源（1）
- 12．インターネット上の情報源（2）

講義の目標

図書館が扱う各種資料について、体系的な知識を得ることを目標とする。図書館の基本は、各種資料を利用者に提供することであると考え、資料を収集し、提供する際の留意点・問題点等を整理する。さらに、近年では、図書館と出版界との関係が注目されているので、図書館資料論の視点から、図書館がいかに関わっていくかについても考えていきたい。

講義概要

図書館資料として、図書・逐次刊行物・各種データベース・インターネット情報源の4種類を取り上げ、それぞれの特徴を整理する。今後の図書館を考えたときにデジタル情報に関する知識は必要不可欠であると考えるので、その部分に関しては特に詳しく取り上げる予定である。そして、それらの資料の収集・受入・保存といった機能に関して、具体例を挙げながら説明する。公共図書館と出版界との関係を考えるために、出版流通の制度と現状についても詳しく見ていきたい。

テキスト

河井弘志編著『図書館資料論』（新・現代図書館学講座8）東京書籍、1998

参考文献

授業中に適宜紹介する。

評価方法

出席回数・レポートもしくは授業中の口頭発表・定期試験で総合的に評価する。

受講者への要望

授業形式・評価方法について詳しく説明するので、受講希望者は第1回目の授業に必ず出席してもらいたい。

年間授業計画

- 1．ガイダンス
- 2．図書館資料の種類と特性
- 3．図書館資料論の歴史
- 4．資料構成・選択の理論／収集方針
- 5．蔵書評価
- 6．図書選択の自由
- 7．資料管理
- 8．分担収集・分担保存
- 9．出版流通制度（1）

科目名	専門資料論（前期）
担当者	植田 喜久次

講義の目標

人文科学・社会科学・自然科学・技術・その他の分野の基本資料に馴染んで、資料の選定・収集（組織化）および案内の為の基礎的要件を養う。

講義概要

それぞれの科学と技術等における資料の生成過程を概観する。それらの資料のアクセス手段について精通への途を開く。それぞれの基本資料を検証する。

テキスト

「専門資料論」中森強編著（新現代図書館学講座；9）東京書籍

参考文献

随時指示する

評価方法

出席 課題調査票の提出

年間授業計画

1. 専門資料とは
2. 資料生成過程，組織化の3要素
3. 資料検証，アクセス手段
4. 人文科学資料
5. 人文科学資料
6. 人文科学資料
7. 社会科学資料
8. 社会科学資料
9. 自然科学資料
10. 自然科学資料
11. 技術資料
12. その他の資料，まとめ

科目名	資料組織概説（前期）
担当者	植 田 喜久次

講義の目標

図書館・情報機関における資料等の活用に結びつけるデータベース等の作成と検索の合理性を追求する。

講義概要

資料等の組織化 = アクセス手段の確保として把握する。資料等の区分と集合化を形状・形式と内容等から判断に導いていく。

資料等の管理とアクセス手段・統制化への経路を理解する = 書誌コントロールとして掌握する。

テキスト

「資料組織法」高鷲忠美ほか編 第4版 第一法規出版

「資料組織演習」吉田憲一編著 日本図書館協会(JLA) 図書館情報学テキストシリーズ; 10)

参考文献

随時指示する

評価方法

出席 定期試験

受講者への要望

資料組織概説（前期） 資料組織演習(後期)の一体過程として受講すること。

年間授業計画

1. 各種メディア
2. Resource sharing (資源の共有化)
3. 資料組織化の沿革と方策
4. 書誌コントロール
5. 書誌記述
6. 目録法：日本目録規則 (NCR), 英米目録規則 (AACR)
7. 分類法：日本十進分類法 (NDC) とその他の分類表
8. 主題分析：基本件名標目表 (BSH), シソーラス
9. アクセスポイント：典拠コントロール
10. 検索
11. 書誌データベース
12. 書誌データベース

科目名	資料組織演習（後期）
担当者	植田 喜久次

講義の目標

主題から，固有名からのアクセスに対処できる提示過程を修得する。

主題と固有名の統制と分散化を制御する。

講義概要

目録の作成と分類作業・件名作業をテキストと配布資料にしたがって演習し，コピーカタロギング（書誌ユーティリティ体制）に備える。

テキスト

「資料組織法」高鷲忠美ほか編 第4版 第一法規出版

「資料組織演習」吉田憲一編著 日本図書館協会（JLA 図書館情報学テキストシリーズ；10）

参考文献

随時指示する

評価方法

出席 定期試験

受講者への要望

資料組織概説（前期） 資料組織演習（後期）の一体過程として受講すること。

年間授業計画

1. 書誌記述演習
2. 書誌記述演習
3. 書誌記述演習
4. 書誌記述演習
5. 分類目録法演習
6. 分類目録法演習
7. 分類目録法演習
8. 件名目録法演習
9. 件名目録法演習
10. 書誌データベース
11. 書誌データベース
12. 書誌コントロールまとめ

科目名	児童サービス論（後期）
担当者	井上靖代

講義の目標

公立図書館・学校図書館などにおける児童向けサービス及びヤングアダルト向けサービスのうち、

- (1) 資料に習熟する
- (2) 実際に子どもたちやヤングアダルトに伝えるためのプログラムの理解と実際を学ぶ
- (3) 子どもの本をめぐる多様な問題 検閲・焚書・絶版・改訂など について考える

ことを目標とする

講義概要

児童心理・読書心理や社会行動といった幅広い観点から図書館における未成年の情報資料提供・サービス提供について、具体的に資料を理解しながらすすめていく。

テキスト

赤星隆子，荒井督子編著『児童図書館サービス論』
改定版 理想社 2001

参考文献

適時指示

評価方法

数度のレポート

受講者への要望

子ども向け資料の選択・提供をおこなうためには司書自身が読んだり、見たり、聞いたりしておく必要があります。かなり多数の子ども向け資料を読んで、書評作成をおこなってもらいます。できるだけいろいろな図書館で絵本や子どもの本を利用できるようにしておくこと。

年間授業計画

1. 現状分析 図書館の4要素、「子ども」の概念、「子ども」をとりまく問題、図書館をとりまく問題
2. 児童・YA サービスの理念 児童・YA 図書館発達史
3. 児童発達心理と読書興味
4. 児童・YA 図書館員の役割
5. 資料選択とどう伝えるか(1) 絵本
6. 資料選択とどう伝えるか(2) 伝承文学
7. 資料選択とどう伝えるか(3) 児童書と児童文学
8. 資料選択とどう伝えるか(4) 科学の本、ノンフィクション
9. 資料選択とどう伝えるか(5) 子ども文化、メディアミックスと「読む」

10. 検閲・焚書、絶版・改訂など 図書館・子ども・子どもの本・情報社会
子どもの権利条約、「有害図書」と青少年保護育成条例など
11. 図書館プログラムの実際 計画立案から実施、評価など
幼児向けプログラム、YA サービス、コミュニティ・サービス、学校との連携など
12. まとめ

科目名	図書及び図書館史（後期）
担当者	松 林 麻実子

講義の目標

図書館が今後どのような方向に進んでいくべきかということを考えるためには、図書館がこれまでどのような形で発展してきたのかということについて知っておく必要がある。本講義では、図書及び図書館の歴史的側面に意識を向けることで、現在の図書館が拠って立つ理念や思想について包括的な知識を得ることを目標とする。

講義概要

まず、記録メディアに関して、その発現・発展を歴史的に追っていく。次に、西洋の図書館史を取り上げ、「図書館」という存在がどのようにして発展してきたのかについて考える。最後に、日本の図書館史を取り上げ、戦時下の図書館が果たした役割や『市民の図書館』以降の公共図書館のあり方等を中心的に論じる。

テキスト

特に指定しない。

参考文献

北嶋武彦編著『図書及び図書館史』（新・現代図書館学講座 13）東京書籍、1998
石井敦編『図書及び図書館史』（講座 図書館の理論と実際 第10巻）雄山閣、1990

評価方法

出席点・レポート・定期試験で総合的に評価する。

受講者への要望

授業形式・評価方法について詳しく説明するので、受講希望者は第1回目の授業に必ず出席してもらいたい。

年間授業計画

1. ガイダンス
2. 記録メディアの歴史（1）
3. 記録メディアの歴史（2）
4. 記録メディアの歴史（3）
5. 西洋の図書館史（1）
6. 西洋の図書館史（2）
7. 西洋の図書館史（3）
8. 日本の図書館史（1）
9. 日本の図書館史（2）
10. 日本の図書館史（3）
11. 日本の図書館史（4）
12. まとめ

科目名	資料特論(後期)
担当者	松林麻実子

講義の目標

学術情報流通の現状やあり方に関する知識を得ることを目標とする。その上で、電子メディアの利用はコミュニケーションの変容をもたらすのか、という問題について、考察していきたい。

講義概要

電子メディアの利用が比較的進んでいると思われる研究活動の領域において、各電子メディアは具体的にはどのように利用されているのか、ということについて、心理学・医学・物理学の3分野の調査結果を基に整理する。また、E-print archive や電子雑誌という新しい情報メディアの利用実態についても、触れる。それらの結果を踏まえて、電子メディアの利用が研究活動にどのような影響を及ぼすのか、ということについて考えていく。

テキスト

倉田敬子編『電子メディアは研究を変えるのか』
勁草書房、2000

参考文献

授業中に適宜紹介する。

評価方法

出席点・レポート・定期試験で総合的に評価する。

受講者への要望

授業形式・評価方法について詳しく説明するので、受講希望者は第1回目の授業に必ず出席してもらいたい。

年間授業計画

1. ガイダンス
2. 学術情報流通とは
3. 学術情報流通と電子メディア
4. 心理学分野における動向
5. 医学分野における動向
6. 物理学分野における動向
7. 研究活動と電子メディア
8. E-print Archives について(1)
9. E-print Archives について(2)
10. 電子雑誌について(1)
11. 電子雑誌について(2)
12. まとめ

科目名	コミュニケーション論（前期）
担当者	町田喜義

講義の目標

「コミュニケーション」の概念を理解し、「コミュニケーション・リテラシー」の理解・応用へと発展することが出来るようにする。

講義概要

<基礎> 「コミュニケーション」「メディア」「メッセージ」の概念を理解する。

<専門> 教育とコミュニケーションの関係を理解する。

<応用> 日常生活における言語・非言語コミュニケーションの機能・役割を理解する。

<総合> 人間の学習とコミュニケーション研究という視点を確立する。

テキスト

使用しない：その都度教材を配布する。

参考文献

開講時に別紙配布する。

評価方法

出席回数：20%（欠席2点、遅刻1点減点）

課題読書レポート：40%

定期試験：40%

受講者への要望

グループ討議・発表などを採用するので積極的に参加・貢献すること。

年間授業計画

1. プロローグ
2. コミュニケーションとは？
3. コミュニケーションとは？
4. 言語と非言語
5. 言語と非言語
6. 言語と非言語
7. メディアとメッセージとの関係
8. ゲーム：理論と実践
9. メディア・リテラシー
10. メディア・リテラシー
11. 具体的経験と抽象的経験
12. エピローグ

科目名	図書館特論（前期）
担当者	松 林 麻実子

講義の目標

近年、公共図書館においても、サービスや機能の電子化が計画されるようになってきた。「デジタル・ライブラリアン」などといった名称が出てきていることから、図書館の電子化・ネットワーク化に関する知識を持っていることが、図書館員に要求される時代が迫りつつあることがわかる。本講義では、図書館の電子化について基本的な知識を得た上で、今後の方向性について考えていきたい。

講義概要

図書館サービスや電子化について、類型・特性を整理する。また、これまで「電子図書館」に関連して、どのような考え方や議論が展開されてきたかということを紹介する。さらに、日本の公共図書館の電子化が現状においてどのような方向性を持っているのか、米国の公共図書館がどのようなサービスを行っているのか、といったようなことについて、インターネット上でやっているサービスを中心に見ていく。

テキスト

特に指定しない。

参考文献

授業中に適宜紹介する。

評価方法

出席点・授業中の口頭発表・定期試験で総合的に評価する。

受講者への要望

授業形式・評価方法について詳しく説明するので、受講希望者は第 1 回目の授業に必ず出席してもらいたい。

年間授業計画

1. ガイダンス
2. 電子図書館の類型・特性
3. 電子図書館の歴史的経緯
4. 電子図書館の事例
5. 電子出版の動向
6. 図書館サービス・機能の電子化（1）
7. 図書館サービス・機能の電子化（2）
8. 図書館とインターネット（1）
9. 図書館とインターネット（2）
10. 米国公共図書館におけるサービス
11. 日本の公共図書館におけるサービス

科目名	学校経営と学校図書館
担当者	井上靖代

講義の目標

学校図書館の教育的意義や経営など全般的事項についての理解を図る。

講義概要

生涯学習社会における学校と学校図書館メディア・センター、そして子どもたち自身の「生きる力」を育てるのは司書・司書教諭の力である。学校図書館における人の役割と果たすべき使命について考えていく。

テキスト

塩見昇編著「学校図書館論 補訂版」教育史料出版会 1999

参考文献

適時インターネットで資料を入手

評価方法

出席 レポート 試験

受講者への要望

学校図書館メディア・センターでの専門職としての基礎学習であるので、授業への積極的な参加を求める。

年間授業計画

1. オリエンテーション
2. 学校図書館の理念と教育的意義
3. 学校図書館の発展と課題
4. 教育行政、学校図書館法と学校図書館、そして学校図書館メディア・センター
5. 学校図書館の経営 施設と「情報化」
6. 学校図書館の経営 人の問題
7. 学校図書館の経営 予算、評価など
8. 学校図書館の経営 施設と資料、選択・活用など
9. 校内の協力体制、研修など
10. 学校図書館活動
11. 図書館の相互協力とネットワーク
12. まとめ

科目名	学校図書館メディアの構成（前期）
担当者	井上靖代

講義の目標

学校図書館メディアの構成に関する理解および実務能力の育成を目指しながら、司書教諭としての基本的な考えの構築を図る。高度情報社会における学習環境の変化にともなうメディアの教育的意義と役割について論じ、同時に各種メディアの種類と特性を説明し、そのメディアの選択と収集を目指し評価を行う能力を養う。

講義概要

学校図書館メディア・センターにおける資料の種類・選択・整理を主としておこなう。

テキスト

志村尚夫編著『学校図書館メディアの構成』樹村房
1999

参考文献

- 『日本十進分類法新訂9版』日本図書館協会
- 『日本目録規則1987年版新訂版』日本図書館協会
- 『中学・高校件名標目表第3版』全国学校図書館協議会 1999

評価方法

出席 レポート

受講者への要望

実務演習が多くなるのでかならず出席すること。

年間授業計画

1. オリエンテーション 高度情報社会における学校図書館メディアの意義
2. 学校図書館メディア・センターにおける資料の種類と特性
3. 学校図書館メディア・センターにおける資料の選択・収集(1)
4. 学校図書館メディア・センターにおける資料の選択・収集(2)
5. 学校図書館メディア・センターにおける資料の組織化
6. 学校図書館メディアの分類(1)
7. 学校図書館メディアの分類(2)
8. 学校図書館メディアの件名目録
9. 学校図書館メディアの目録(1)
10. 学校図書館メディアの目録(2) データベース化
11. ファイリング資料の構築
12. まとめ

科目名	学習指導と学校図書館（後期）
担当者	井上靖代

講義の目標

学習指導における学校図書館メディアの活用についての理解を図る

講義概要

総合的学習などの実習の科目が登場するなど学校教育は変化してきている。その児童・生徒たちの主体的なメディア活用能力の育成を目的とした授業成立を援助する学校図書館司書教諭の役割を理解し、実践する。

テキスト

なし

参考文献

適時提示 インターネット情報

評価方法

レポート デモンストレーション 出席

受講者への要望

実践的な教案作成・発表をおこなうので、教職課程での授業と連動して学習してほしい。

年間授業計画

1. オリエンテーション 学校図書館の事例紹介
2. 学校図書館の成立
3. 主体的学習とメディア活用能力育成
4. メディア活用能力育成の計画と方法
5. メディア活用能力育成の展開 「図書的时间」などを設定しての指導計画作成
6. メディア活用能力育成の展開 教科等と融合しての指導計画作成
7. レファレンス・コレクションの選択・収集・整備・活用(1)
8. レファレンス・コレクションの選択・収集・整備・活用(2)
9. 学校図書館における情報サービス 児童・生徒への情報サービス提供
10. 学校図書館における情報サービス 教職員への情報サービス提供
11. 教員への支援と働きかけ
12. まとめ

科目名	読書と豊かな人間性（後期）
担当者	井上靖代

講義の目標

学校図書館の機能を一層充実させ、児童・生徒の読書の相談、発達段階におこなう適切な読書教育の理論とその具体化のための読書指導の方法論を身につける。

講義概要

小・中・高校の図書館を舞台として、児童・生徒に「読むことは楽しい」ということを実体験してもらい、「読む」ことによって多様な生き方やものの考え方を知り、自分自身を考え、自分自身の生活を選び取っていく力を身につけてもらう援助活動をどうするのかを考え、学校司書や司書教諭として実践していく力をつけるために、多くの読書資料にふれる。

テキスト

なし。印刷配布する。

参考文献

赤星隆子編著「児童図書館サービス論」改定版
理想社 2001

評価方法

レポート デモンストレーション 出席

受講者への要望

子どもに読書をすすめるには、まず司書教諭自身が読んでおく必要があります。ですから、かなりの数の子ども向け資料を読んでもらうこととなります。

年間授業計画

1. 子どもの「読む」ということを考える
2. 子どもの発達心理と知的好奇心について知る
3. 児童・生徒向け読書資料の種類を知る（1）絵本
4. 児童・生徒向け読書資料の種類を知る（2）幼年文学など
5. 児童・生徒向け読書資料の種類を知る（3）ノン・フィクション
6. 児童・生徒向け読書資料の種類を知る（4）児童文学・児童文化
7. 子どもの本を自分で読む・批判する
8. 子どもに「読む」楽しさを伝える（1）
9. 子どもに「読む」楽しさを伝える（2）
10. 子どもに「読む」楽しさを伝える（3）
11. 家庭・地域・公共図書館などとの連携
12. まとめ

科目名	情報メディアの活用（後期）
担当者	福田 求

講義の目標

学校教育においてその重要性が再認識され新たな役割を担うことが期待され始めた学校図書館における多様な情報メディアの特性と活用方法の理解を図る。

講義概要

まず、現在までの情報メディアの発達と変化を検討することで、現代社会が高度情報社会であることを確認し、その社会の中でどのように人間が位置づけられるのかを講じる。また、各種情報メディアの特性について概観した後、学校教育の目的や状況に応じてどのようなメディアを選択すべきかも考察する。次に、視聴覚メディア、教育用ソフトウェア、データベース、インターネットといった各ツールごとにその活用方法について、学校教育との関わりを見ながら、具体的に論じていく。そして最後に、学校図書館メディアと著作権の関わりを講じ、また、講義全体のまとめを行う。

テキスト

指定しない。

参考文献

適宜指示する。

評価方法

出席・授業中のレポート・学期末試験。

受講者への要望

本講義では教室の構造上定員を設けており受講者の抽選を行う。抽選作業については時間割表を参照し、不明な点があれば教務課経済学部窓口で確認すること。今年度からは「授業中の抽選」は行わないので注意すること。

年間授業計画

1. オリエンテーション：年間予定、授業方法等の注意事項について説明。
2. 高度情報社会と人間。高度情報社会と学校教育。
3. 情報メディアの特性と選択。
4. 学校教育における視聴覚メディアの活用。
5. 学校教育におけるコンピュータの活用。
6. 教育用ソフトウェアの活用。
7. データベースと情報検索。
8. データベースと情報検索：学校教育との関わりから。
9. インターネットによる情報検索と発信。

10. インターネットによる情報検索と発信：学校教育との関わりから。

11. 学校図書館メディアと著作権。

12. まとめ。